Nara Women's University

# 高校生における学友関係の実証的研究



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 奈良女子大学文学部附属中学校・高等学校<br>公開日: 2010-11-10<br>キーワード (Ja): 集団生活, 悩み<br>キーワード (En):<br>作成者: 横山,一郎<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10935/2383 |

# 高校生における学友関係の実証的研究

その1，本校生の悩みにおける学友関係の一考察

その2，本校生の学友関係の実態に関する一考察

その3，本校生の学友関係の集団場面に関する一考察

横　山　一　郎

## 1. 研究の目的

高校教育が社会力[1](Social force)とどのように対していくべきか，又社会力をどのように受けいれていくべきか，再吟味する必要があるようである。

近年，学校教育のあり方については，いろいろの特性が含まれるが[2]，その目標の前面に人間形成をあげているところに大きな意義をみいださなければならない。人間形成の用語が抽象的であるが故に，教育の場ではややもすれば具体的事象のために，人間形成は側面においてやられてしまうこともある。

又これらの目標の変化の過程にみられるような偏知主義と人間形成の対比の研究[3]が現在のこれらの教育目標の意義を明確に位置づけているようでもある。

しかし現実に意図的教育としての学校教育において，しかもとくに高校における「現実の働きかけ」は人間形成の教育の業績に足ぶみを強いているような面のあることもみのがすことはできない。

信値的には人間形成をとなえながら，又偏知主義の病害を理解しながらも，ある場合にはそれに間接的寄与を加えながら足ぶみをさせるような矛盾を存在させているようである。このような矛盾の現象は social force の複雑さと学校教育の複雑を痛切に味わいせ，さけられない「現実なのだ」と云う用語で，その内容への近接した働きかけをわすれた姿を浮きぼりにするようである。

学校教育を「現実の諸関係の中から，新たな発展の可能性を見い出し，その可能性とのかかわりで学校教育を考えるか，現実の諸関係の中に埋没し（とくに学校教育の歴史的な考察における問題提示にとどまり），学校教育を場あたり的に現実に適用させようとしているか[4]」の立場を明確にする必要があろう。これらの立場の明確さが social force の受けとめ方と関連をもってくるものであろうから。

人間形成をとなえる限りにおいて現在の学校教育を直視し，歴史的に基礎的社会[5]と切り離された存在から，教育実践の現実態と社会進歩の方向とを統一的にとらえる必要があろう。

現実態としての進学，就職の問題（学校教育の実態の全てという意味ではないが）そのとらえかたにおいて多様であるにしても，現在のとくに高校教育に影響を与えている（影響の与え方については各分野研究がある）ことは否定できない事実である。

そしてその影響の与えられたが，既述の矛盾を生じせしめている大きな因子と思われる。が，それら矛盾の中で学校教育が進行していることを考えるとき，その矛盾や，それらの問題の所在を明かにすることに努力をはらわなければならないだろう。そうすれば現在の高校生活の断片，あるいは統一の正しいとらえかたもできてくるのではなかろうか。

進学，就職の問題についてもこれを歴史的に位置づけて[6]考察するときに，現在のようにこれらがかつてみられないような国民的関心事となったのは我が国においては特殊な歩みをみたにしても，大正末期から昭和の初めである[7]，それ以後除々に学校教育への影響は大きくなりニ

1) A,K,C,Ottaway Education and Society 福永安祥訳（教育と社会）1953.p79関書院
2) ① 波多野完治　現代教育学（教育学概論）1961.pp2～岩波書店
② 清水　義弘　〃　〃　〃 pp59～　〃
③ 清水幾太郎　〃　（教育哲学）1960.p40.　〃
④ 長田　新　〃　〃　〃 pp209～213 〃
⑤ 上原　専禄　〃　（教育思想）1961.pp314～315 〃
3) 阪本　一郎他，　個性の診断，教育診断選書1961,pp7～8　牧書店
4) 川合　章，　教育実践の組織化と教育研究，現代教育学，1961,第17巻pp114～115岩波書店
5) 清水　幾太郎，　社会的人間論，1954,p39,pp77～89　角川書店
6) 小川　利夫，　進学と就職，現代教育学，1961第16巻pp26～27　岩波書店
7) 宮坂　哲文，　進路指導の現代的意義，国民教育と生活指導，1960,pp149～153　明治図書

種類の青年期[1]を生じせしめたり，もろもろの新しい現象を生じせしめている。

近年の進学率や教育の国民的最低限の移行[2]は青年期の分裂，自殺，不良化，学習意欲，学力のゆがみ，生徒間の分裂など時代の変化という尺度からだけでは説明できない数多くの問題をなげかけている。

また時代の変化，教育目標の変化は家族集団や，学校集団の人間関係においても多くの変化を生じせしめている。

勿論，各集団の機能の減退[3]が人間関係にも変化をおよぼしていることはゆうまでもないが，これらの変化は中学から高校への生理学的，心理学的，社会学的，もろもろ学習者や環境の現象の把握やその指導において，新しい知的働きかけを要求している。

社会のもろもろの因子と関係をもちながら個体はそれの因子と関係をもったり，あるいは独自の働きを発現している，それらが，人間形成材料として現に存在している以上繰りかえし確認しなければならない「近接」を。そしてその近接にあわせ遠接的に social force をあきらかにすることを目しなければならない。

一方知識として人間形成に関する学習は，意図的，無意図的に（観念的な面もあろうが）実施されてきた。中，高校期はこれらを価値感として受けとる時期でもある（青年期の価値的欲求の高まり，一論理，倫理，審査など一を意味する），現在の学校教育では表面的には人間形成をかかげ，その場が（人間形成にはまずその場を与えることが必要である。一大学学長会議発表一）が失われてゆくことにはあまり神経質でなく，むしろ近視眼的事象にはヒステリック[4]である。中学，高校期に内部的世界[5]を経験しはじめるにしたがいもろもろの悩みにそうぐうする，数量的表現になるがそれらの悩みに加えて，理想と現実の問題とにあまりにも明白な自分達の生活環境の学校に目をむけさせる。そして理想と現実の距離感[6]をいだかせ，それらの距離をせばめる努力を青年期の特性であると云うことで期待する，しかし距離感の認識よりも以前に彼らをそれから遠ざける結果となっていることはないだろうか。

その結果は悩みをもたない幼児的青年期[7]をすごすことを生じさせ，精神衛生的多くの問題を現実に，そして将来に多く残すことになる。又この事象と併合して教師集団と生徒集団で価値感や，教育活動に認識の差を生じせしめていることは考慮する必要[8]がある。

この両集団に差が存在することは人間形成の教育を施すときにはとくに障害が大きいといわれなければならない。内面的距離感が応々にして権威の否定（青年期に）出発しているとすれば　この両集団の巾をうめることの努力は大変なことであるが，この巾が縮まる方向へ向わないとすれば学習から出発した教育はその内容を失ってしまうだろう。

今まで学校教育全般から，学友関係との関連事象の把握につとめてきたが，学友関係を糸口にして social force の究明や関連がいくらかとらえられるようである。social force を学校教育の目標とたえず 一致させることはある場合には必要なことである。しかしそこには価値感の共通化を前提としななくてはならない，そしてその価値感は青年期の自我の目芽とともにその多くが出発することこれらからある意味では将来の共通化の見通しはあかるい，人間形成の教育が単に形式に流れずに実質をたえずたくわえることに研究がはらわれるならば……。教師集団と生徒集団の巾が存在する場合，あるいはこの巾が狭ばまる方向へ向ったにしても学友関係の存在は重要視されてくる。それはある場合には指導の手段として生かされようし，個人にとっての精神衛生的価値，および社会問題との関係においてもである。これらの価値について

1）小川　利夫，進学，就職問題と教育における疎外状況，現代教育学1961，第16巻pp28～30
2）小川　利夫，進学，就学問題と教育の国民的最低限，現代教育学，
3）とくに家族集団の機能の減退について清水幾太郎氏は社会的人間論p102で記している。
4）ここで用いる意味は一般に用いられる異常とさすのではない，ヒステリー反応の意味である
　島薗　安雄／菅又　淳｝精神の疾病，障害，保健体育学講座1958，第2巻p464　体育の科学社（を参照されたい）
5）依田　　新，内界の探究と悩み，青年心理学講座3，1959，pp3～5　金子書房
6）依田　　新，内界の探究と悩み，青年心理学講座3，1959，pp29～30
7）ドベス吉倉範光訳，青年期，1951，pp127～132白水社
8）㋐　ウィラード，オォーラー（石山修平訳）学校集団—その構造と指導の生態—1957，p350～　明治図書
　㋑　中森　孜郎，教育についての意識，現代教育学1961，第18巻pp168～176
　㋒　津高正文，教師と生徒，現代教育学，1961，第16巻pp258～260
　㋓　鈴木　　清，教師への反抗と崇拝，青年心理学講座，1959pp35～44pp59～63
　㋔　は内面的なものとして㋐～㋒とは立場を異にするが，中，高期に巾を生じせしめる因子としてとりあげた。

は多くの研究[1]がなされているし，又その価値の有意性も認めている。その研究の中でも，とくに心理学の世界での取扱い方に歴史的に若干の変化をみせているようである。この変化が「個人の内面と外面の緊張関係から生じたものが」，あるいは「外面からの力が内面のありかたを圧しているのか」を明かにする必要を感じるのは不自然なことではないだろう。そこにどのような友人関係が存在しているか」，からを導入し，それを問題児の指導場面のみに用いず[1]，「悩みの解決場面に利用するにはどのようにすればよいか」，「学校教育の中で友人関係促進の場はどこか」，「学友関係の中で我々が意図しなかった教育効果（効果と云う用語を適切でないかもしれないが）はないか」などをあきらかにしてみたい。それが人間形成の教育場面にして有効であることは，人間形成を主目的としなかった教育形態においてもあきらかに人間の人間たるためには必要なことがとかれている。「人間とは」と云う焦点が学校教育でも問題にされだしたのは，そんなに古いことではない。人間の規定が一部の集団をさす用語として使用された歴史は古い。しかし，子供，有色人種，女性などが人間にして考えられるようになったのは20世紀にはいってからであると云っても過言ではないであろう。そこには今まで考えられていた「人間としていた集団における友人の重要さ」と，人間の層の広がりをみた現代の人間における友人関係が同様であるかということに，又一度焦点をむける必要を感じるものである。かつて高校が社会のエリート層に位地していたときの友人よりも，現代の高校進学の低辺があがってきた，多くの個人差をもった集りはその友人関係においても異質であろうし，又その関係は社会の人間関係への発展的寄与をも可能にするであろう。男女の友人仮設を関係などとくにこの対象となるものと考える。これらの社会調査，実験をくりかえしながら，統計的処理だけにまよわされず，検証をくりかえしながら，こつこつと積み重ね，継続的に研究してみたいと思う。この目的はこの研究が終るまでの目的でもある，しかし段階的には自己の研究の進め方が一人よがりになりすぎてはいけないと思うし，一部でも資料の発表などしていくことがあると思うが，たえずこの目的が，その内容に満たされるとは思われない，とくにこの紀要の原稿になった部分はその出発的位地である。実態の把握に観点をしぼったつもりであるが，実態の把握についても一面的把握の感をまぬがれない，継続的研究の研究目的は，しかし研究の希望になる。

## 2. 研究方法

(1). 質問紙法による調査
(2). 観察法による調査
(3). 事例研究法，面接法による調査
(4). ソシオメトリーによる調査
(5). 文献研究

## 3. 各調査の項目

(1) 質問紙法

㋐. 高校生の悩みがどのようなものがあるか，それの統計的位置ずけ，および学友関係に関する悩み，と悩みの解決法としての学友関係の位置ずけをこの調査で知る。

㋑ 学友関係が数量的にどのように規定されるか，それが情緒的結びつきとどのような関係をもつかを調査で知る。

㋒ グループ，ダイナミックスと情緒的結びつきの関係，および，クラブ，ホーム・ルーム活動と学友関係促進因子との関係を知る。

(2) 観察法

㋐ とくにクラブ集団などの活動を対比できるように観察する（特別抽出なし）

㋑ 休けい時間の特定グループの観察（抽出）

(3) 事例及び面接法

ソシオメトリーの確認とクラブ活動，学友関係変化を知る。

(4) ソシオメトリー

学友関係促進の場がどこにあるか，どうような運営と関係があるか，場理論との関係を知る。

## 調査方法

1. 教育研究所や，他校の悩みの調査を参考に質問項目を設定し，質問紙法で調査をおこなう，質問紙

1) ㋐ 依田　新，内界の探究と悩み，青年心理学講座，1959，pp18～21
㋑ 古箱　安好，学友関係的要因，教育心理1956，第4巻p26
㋒ 清水幾太郎，社会的人間論，1954，p110
㋓ 石崎恒次郎，現代教育社会学，1956，pp140～157　理想社
㋔ 望月衛，青年心理学，1951，p.71　光文社
㋕ 阪本　一郎他　人間関係の診断，教育診断法選書，1961，p163.
㋖ 東京教育大学付属高校研究紀要　友人関係の促進と人権意識を向上させるための読書指導1959
1) 豊沢登，新しい生活指導の技術，1954，p1　葉生書院

法では制限応答式を併合し，制限応答式では択一式で行う。

2. 友人関係（同学校，同学年という規準で学友関係と同意に解釈）の質問紙による調査をおこなう。

3. ソシオメトリーの無制限応答を用いた調査をおこなう。

**調査の期日及び対象**

1. 悩みの調査，35年9月

**集 計 基 準**

**性別，学年別，集団別，及び質問項目**

2. 友人関係の実態35年9月

3. 学友関係の場に関する調査　36年6月
　　36年10月
　　37年12月

奈良女子大学部付属高等学校

1. 男子 70名　女子 79名

2. 男子193名　女子227名

3. 男子 68名　女子 71名

## 結果と考察

### ① 悩みの実態

—— I ——

アンネ，フランクのアンネの日記，ヘルマンヘッセの車輪の下などの主人公が感じたような内部的世界（Innenwelt[1]）が今日の高校生の中にも青年期の本質的特徴にして位置を占めていると考えられるであろう。

自我の発見から，自分のからだ，自分の能力，が自己の姿としてうつしだされ，自分の評価をたえず意識しはじめるようになる。自己の評価がたえず劣等感や，無力感をともなうにしても，価値的欲求の高まりは自己の内部的不可解さに直面させるようである。

孤独，自己凝視，自己弁護，自意識過剰，懐疑，自己嫌悪，これらは自我の高まりとともに必ずといっていゝほどその過程において伴って発生し，交錯するものであると考えられる，ここから必然的に悩みを生ずると考えてよいであろう。

理想と現実との距離にきずき，これを何とかうめたいとする努力が悩みを生じさせると考えていいようである。あくまでもそれは理想実現への過程における現象であり，悩みをなつがしがる時，あるいは要求水準の低いときは悩みが生じがたいことを裏がきしていると考えられる。これらの意味において青年期の悩みは理想実現への接近と考えてもよいであろう。

表1にみられるように勉強に関する悩み，そしてその内容も勉強の仕方，勉強と注意集中に高い%がしめされている。自分の絶対的能力は否定したくない，安定や自己の評価，価値へは敏感であり，方法の上で解決したい希望がこの中にしめされているようで，青年期の特性と考えていゝたろう。又成績と努力の関係についても相当の%があるのは学業そのものに対する考えかた，および，上述の他へ向けるのを自己の内部でとどまらせている場合などが，一層これらの要因の存在を必要

表1. 悩みの実態その1

| 学年 | 性別 | N | A. 勉強のことに関して | | | | | | | | B. 健康や容姿に関して | | | | | | | | C. 自分の性質に関して | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 勉強の仕方について | 成績と努力の関係 | 勉強と注意集中 | 勉強とクラブ活動 | 受験教科と勉強との好き嫌い | 勉強と手伝との関係 | その他 | $N_1$ | 身体と劣等感 | 体格と劣等感 | 健康増進について | 容姿について | 健康に対する自信 | 運動神経について | その他 | $N_1$ | 何人かに劣等感でも | 社交性にとぼしい | 短気で攻撃性に | ひねくれている | 意志薄弱である | 神経過敏である | その他 |
| 中学一・二年 | 男 | 102 | 30 | 29 | 40 | 10 | 2 | 2 | 6 | 119 | 57 | 7 | 11 | 2 | 5 | 7 | 5 | 94 | 10 | 22 | 16 | 6 | 13 | 22 | 5 |
| | | | 25.2 | 24.4 | 33.6 | 8.4 | 1.7 | 1.7 | 5.0 | 100 | 28.5 | 12.3 | 19.3 | 3.5 | 8.8 | 12.3 | | 100 | 10.6 | 23.4 | 17.0 | 6.4 | 13.8 | 23.4 | |
| | 女 | 93 | 41 | 30 | 30 | 8 | 1 | 0 | 4 | 114 | 52 | 3 | 9 | 10 | 8 | 13 | 2 | 95 | 22 | 14 | 15 | 9 | 11 | 21 | 3 |
| | | | 36.0 | 26.3 | 26.3 | 7.0 | 0.9 | 0 | 3.5 | 100 | 13.5 | 5.8 | 17.3 | 19.2 | 15.4 | 25.0 | 3.8 | 100 | 23.2 | 14.7 | 15.8 | 9.5 | 11.6 | 22.1 | 3.2 |
| 高校一年 | 男 | 70 | 17 | 19 | 24 | 20 | 2 | 1 | 3 | 86 | 48 | 3 | 1 | 2 | 12 | 11 | 4 | 79 | 10 | 22 | 13 | 6 | 16 | 9 | 3 |
| | | | 19.9 | 22.1 | 28.1 | 23.0 | 2.3 | 1.1 | 3.5 | 100 | 31.2 | 6.2 | 2.1 | 4.2 | 25.0 | 23.0 | 8.3 | 100 | 12.6 | 27.9 | 16.4 | 7.6 | 20.3 | 11.4 | 3.8 |
| | 女 | 79 | 38 | 23 | 23 | 8 | 5 | 2 | 2 | 101 | 56 | 9 | 3 | 2 | 17 | 9 | 13 | 3 | 22 | 27 | 11 | 7 | 14 | 18 | 4 |
| | | | 37.0 | 23.0 | 23.0 | 8.0 | 5.0 | 2.0 | 2.0 | 100 | 16.1 | 5.4 | 3.5 | 30.4 | 16.1 | 23.1 | 5.4 | 100 | 21.0 | 26.0 | 11.0 | 7.0 | 13.4 | 17.6 | 4.0 |

1) 依田　新，内界の探究と悩み，青年心理学講座3，1959p3

視させることになっているようである。

勉強が入試制度にたえず関連をもってくるようになると，そこに示される数量的取扱いに敏感になり，できるだけ自分の能力の否定まではいかず，他のあるいは周囲の条件をととのえることで自分の「数量化できる能力」を高めることに悩みを存在させてくる。

相対的自分の能力，それもすべて数量化を通すような勉強への悩みは，人間科学的数量化がおしすゝめられれば別であるが，入試制度が現状のままで進められるとすれば，[1]相対的悩みとして，勉強そのものへは正対せず，「見られる自己」への適応として受けとられこの受けとられかたが中心的位置をしめるようになるだろう。これら相対的関係に自分をおくこともある場合には必要なことかも，しれないが自己を高めること，これらは悩みとたえず同次元に位置するものと考えられる。この高めかたに，自己の能力や識見や人格においてより高い位地をしめる。このためには他よりも多くの努力や修養をつみ重ねなければならない。もう一つは自分はそのままでも他の位地を引ずりおろせば相対的には自己の地位が上ることになる，[2]そのために中傷とか悪口という形で他の人格を傷つけ欠点をさがし出す努力をすればよい。

日本の生活習慣の中には，後者にあたるような島国根性があり，その病害が近年の高校生の日々の現象に現われている面はないにしても，さぐり合いは存在している。

又この相対的生活態度（習慣）の現象が青年期の本質である悩みの世界へ，あるいは自己をみつめる機会をなくしつゝあることも認めなければならないのではないか，たえずどこかに依存している存在，心理的離乳のおこなわれない，幼児的青年期をすごしている高校生はないだろうか。学校教育から学校外の知識教育（とくに予備校，家庭教師，それにマスコミの学習プロなど）は彼らを依存的な立場にこそおくことはあっても，主体的にそして自己への投射を可能にする条件が以前と同じではないであろう。封建的な生活からは自主性は生れてこない，この表面的制度の飛躍にもかかわらず，現存する青年期の一つの姿はそのままみすごすにはあまりにもことなかれ主義に徹していると考えなければならない。とくに男子において個性発現の場としてクラブ活動と勉強の関係に高い%をしめしていることにも注目しなければならない。クラブ活動が教育の目標である人間形成には有効な場であると考えられ，又そのおこない方は理想的に計画されるようである。（運動クラブについてはまだ問題がのこされているし，性別による取扱いにも問題点は残されているが）これを受けとめる学習者の側で理想と現実を同一場面で経験させる。勉強との相対的現実については統一的見解が保たれながら，クラブ活動については価値感と現実のおこないには指導者の間でも同一見解に立つことがむずかしい。クラブ活動の成果も現実に大学にはいった人の口から発せられればその意義もみとめられ，入試に失敗した人の口からのクラブ活動の意義は無視されがちである。クラブ活動が問題児[3]（学校では成績不振者をこのようによぶ場合がある）の活動の場におきかえられている面，などこのうけとめかたにもっと指導者側の直視を迫られているようである。

表1Bの健康容姿に関しては，体格，健康など男子に高い%をしめしているのに対し女子には容姿，運動神経など表面的なことが多い点，青年期の一般的現象もさることながら意識としての女性と実存の女性[4]の差異，および人間像[5]の一面がうかがえる。

表1Cの自分の性質に関しては，とくに女子において劣等感と自分を関連ずけているようである。とくにBでもとらえたように表面的，数量的面に自己の認識の出発（青年前期）がある場合，対比現象は当然のことだろう。社交性

1) 入試制度に関してはその病害がいろいろ審議され，入試とその後の学習生活との関連などの調査もある。これら病害に対して37年10月の新聞にはこれを積極的に改善する意図が発表されている。

2) 鈴木清，教師への反抗と崇拝，青年心理学講座3.1959p53.

3) 欲求との関連のみでなく，個性の発現として真険にとっくんでいるものは対象外である。運動クラブではクラブのもち方，個人の疎外の条件など，学校のクラブはまだまだ整備されなければならない多くの問題点をもっている。

4) ⑦ 横山 一郎 体育的活動の実際場面における男女差の実証的研究 奈良女子大文学部付属中，高研究紀要3集1960

④ 鷹野 健次 横山 一郎 運動における性差体育心理，1962,pp141～149錦正社

⑦ 原 芳男 教育的人間関係における年令と性，教育社会学研究，1962,pp50～58

5) 横山 一郎 体育的活動を通して大人の提示する人間像における男女差の一考察，体育と小集団研究会1集1961

に乏しいなど「他からみた自分」と「自己からみた自分」の分裂の時期などがこれらの発生要因の一つとみなされるであろう。

表2，悩みの実態その2

| 項目 | | | D. 家庭に関して | | | | | | | | E. 学校生活に関して | | | | | | | | F. 友人関係に関して | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学年 | 性別 | 内容 | 家庭の争い | 両親の無理解 | 父又は母がない | 兄弟姉妹がない | 家計が苦しい | 家族に病人がいる | その他 | N1 | 人間的教師がない | 教師がえこひいき | しつけがきびしい | 予備校化している | 一部の生徒ついていけない | 施設用具の不備 | その他 | N1 | 心から信頼できる友がない | 友達に親切にされない | 異性の友人が欲しい | 異性が性の問題を干渉されること | 親が性をとやかくいわれること | 友人と遊ぶ暇がない | 親と仲がよくない | その他 |
| 中学一・二年 | 男 | N | 10 | 9 | 1 | 5 | 1 | 3 | 5 | 34 | 12 | 15 | 0 | 11 | 16 | 4 | 4 | 62 | 36 | 3 | 15 | 21 | 7 | 3 | 2 | 2 |
| | | % | 29.4 | 26.5 | 2.9 | 14.5 | 2.9 | 8.8 | 14.5 | 100 | 19.4 | 24.2 | | 17.7 | 25.8 | 6.5 | 6.5 | 100 | 47.4 | 3.9 | 19.7 | 27.6 | 9.2 | | 2.6 | 2.6 |
| | 女 | N | 3 | 10 | 3 | 4 | 1 | 1 | 8 | 30 | 10 | 10 | 4 | 8 | 22 | 3 | 4 | 61 | 18 | 7 | 17 | 18 | 3 | | 2 | 1 |
| | | % | 10.0 | 33.3 | 10.0 | 13.3 | 3.3 | 3.3 | 26.8 | 100 | 16.4 | 16.4 | 6.6 | 13.1 | 36.1 | 4.9 | 6.6 | 100 | 26.1 | 10.1 | 24.6 | 26.1 | 4.3 | | 2.9 | 1.4 |
| 高校一年 | 男 | N | 7 | 5 | 3 | 2 | 0 | 1 | 3 | 21 | 29 | 3 | 2 | 14 | 1 | 10 | 2 | 58 | 20 | 2 | 17 | 8 | 3 | | 7 | 1 |
| | | % | 33.2 | 23.9 | 14.3 | 9.5 | 0 | 4.8 | 14.3 | 100 | 47.5 | 4.9 | 3.3 | 23.0 | 1.6 | 16.4 | 3.3 | 100 | 34.5 | 3.4 | 29.3 | 13.8 | 5.4 | 12.0 | | 1.6 |
| | 女 | N | 6 | 9 | 4 | 12 | 5 | 2 | 6 | 44 | 37 | 2 | 3 | 20 | 5 | 3 | 4 | 74 | 21 | 6 | 15 | 6 | 7 | 7 | 7 | 2 |
| | | % | 13.6 | 20.5 | 9.1 | 27.3 | 11.3 | 4.6 | 13.6 | 100 | 50.2 | 2.8 | 4.2 | 26.2 | 6.9 | 4.2 | 5.5 | 100 | 32.8 | 9.4 | 23.5 | 9.4 | 10.9 | 10.9 | | 3.1 |
| | | N | 102 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | % | 93 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | N | 70 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | % | 79 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

家庭に関しての悩みの中では両親の無理解家庭の争いなどが高い%をしめしている，これらは戦後の家族制度に対する根本的な変革が関連していると思われる。

社会的伝統によって培われた家本位，家長中心の考え方は国民的感情として根強く残っていると思われる，新しい時代の思想によって育てられた児童との間に多くの緊張と葛藤とを発生させていると考えられる，これらは日本の家族制度的特質から発生したものと，青年の成長，発達に伴って発生する家族間の人間関係の緊張があることは云うまでもない。家庭の争いの中で，自分と家族の争いの他に，父親と母親の争いをあげているものがあった点，意識としての女性の位置と現実の社会機構の中での位置の違いが彼らにして悩みの材料になっていることをみのがすことができない。

学校生活に関して（調査が高校生については調査対象が高1なので，今からの変化をむしろ問題にすべきだろうが），「人間的教師がいない」「，学校が予備校化している」の二つの%がかなりたかい。勿論高1の経験の少なさからくるものもいくらかあるだろうが，付属中学からその大半が入学している点などから，やはりこの見方が時間を経るにしたがってそれほど変っていくとは考えられないのではないだろうか（とくに高等学校においては全国的傾向の一つでもあるから）。

教師が「大人への反抗」の対象の一部となしていることは云うまでもない，それまで彼らの側で絶対視されていたものが，相対的に位地が下り，その中に批判が加わるようになる。教師への尊敬や信頼は一般的には青年期になるにしたがって低下していくのが普通だといわれる。[1] 又質的な面で，中学生では先生のヤリ方に批判したりすることが多いが高校になると「教師そのもののあり方」を考えたり，「そのあるべき姿」から「逸脱」「内面的人格的な不満」が主になってくる，いわゆる小学校時代の師弟関係の保護依存関係から，信頼関係が複雑になり，「信頼する教師」，「敬遠する教師」「反抗する教師」と分化が行われるようになる，そして教師に対して個人差（家庭への依存度，心理的離乳など）が生じてくる。又この時期の批判が自発的使用の原理[2]（Princeple of Spontaneous）に依るとする説にも耳をかたむける必要があろう。

1）鈴木　清，教師への反抗と崇拝，青年心理学講座3.1959p38.
2）ジャージルドによると人は発達しつつあるものを自ら積極的に使用しようとする傾向をもつといわれてい

これらの現象は自分と他の距離の認識からおこるものであり，教師が青年前期の反抗対象にして好都合であるということを認識した上で彼らに接する必要があろう。意見についての教師と生徒の側で割合に意見の対立がみられないのは位地が近くないために，権威が前にでてくるため意見の対立はあまりおこらないといわれているが，教師の側からも自分の主観の思う通りになる生徒をもっと多面視する必要があろう。教師の権威性を否定だしたことは反面，教師をより人間的に認識しようとすることのいとなみであることもみとめなければならない。又この時期に安定への要求もその発達的特性から高いことも留意する必要がある。反抗の裏には安定の欲求が一体となしている場合がおうおうにみられるから，この点に関して一般には快楽への逃避，集団避への逃，感情的解決，理論的解決におこなうのであろうが，高校生の場合，これに理論的根拠をもたせて解決しようとする。その結果，真にたよるべきものを教師の中にみい出すと，献身的な尊敬の念をささげる，これらは「人間的教師への要求」という形をとることになるだろう。

人間的教師とはどどのようなものをさすか，いろいろな調査[1]がおこなわれているが，それらの中に共通にあることは，「理解がある」「よく教える」「ひいきしない」「生徒と一緒に行動する」などで，人間的要求が高くなることがこれらの資料から説明できる。

これを指導する中で生かすとしたら，「青年への理解から出発しなければならない[2]」だろう。青年期の反抗や虚勢や粗暴が，ある程度まで青年期の特性であり（勿論，社会的不適応行動とは区別されなければならない）指導者が過去の経験にだけたよるような指導に立脚したならば，たとえば「時代の差と認めない[3]」，（今日の日本のおかれているほどその差のいちじるしいことはないだろう），「個人差のあることを認めない」又「自分の過去が美化されがちであることを認めず，都合のよいことばかり前面に出す」などはこれら理解のときは障害になる。科学的立場からの正しい理解が要求されてくるのである。

友人関係に関しての内容では，「心から信頼する友人が得られない」「異性の友人が欲しいが勇気がない」にかなり高い%がしめされている，これが心理的発達上の特性[4]としてこのような理由のあげられているのか，それともそれらとも関連をもつが，心理的要因以上に社会的要因によってこのような条件が存在させられているとすれば，それらの因子究明には多面的な配慮が要求されるであろう。友人，その中での親友のあり方についてもいろいろな考え方がのべられている。協力関係が全てであり，その中に一次的に競争的感情場面があったにしても，それは協力の中に包括されるとするもの，[5]現在の親友関係は協力と競争を同意味において備えているものであり，そのバランスのとり方が親友関係を支えるとするもの，[6]その中の情緒的関係について結びつきの要因の具体的結びつきから親友を規定しているもの，[7]などとらえかたによっても勿論多岐にわたることはいうまでもないが，これらは規定のしかたに慎重さが要求されることを裏がきしているようである。

自己の慰めの理解者としての日記から，友人への心理的，社会的移行，これらはいわゆる自分の心をうちあけることのできる人，自分のいうことを聞いてくれる人，自分賞賞してくれる人，学校や生活についてのミ力的な話しをする人，自分を慰めてくれる人を欲しているのである。

今まで（発達的に）家庭や学校などのことは無批判に受けとられたのに，これらに価値的欲求の高まりから不信や，反抗が生れてくる，そしてこれらの相談相手としての友人を求めることになる，これら友人の一般的条件では相対的意味より自分を受けいれることに重点的意味をおいていたと受けとっていのいではないか，というが現実には相対的条件およびその意味がより現実をおびた社会的価値に直結するとなると既述の必要条件だけではみたされない，自

る，これを自発的使用の原理とよんだ，発達に伴って内的 motivatian がおこりそれによりその機能や特性が使用され練習される。

1) 鈴木　清　教師への反抗と崇拝
中森　孔郎　教師の条件，現代教育学18巻p166～ウイラードウォラー石山修平訳，学校集団p310～など
2) 鈴木　清　教師への反抗と崇拝p73～76
3) 波多野完治　人間の成長と学習，現代教育学２巻pp3～4などがこれらに対する重要な取扱方をしている。
4) 田中熊次郎　社会的適応と友人関係，人間関係の診断，pp,169～170.1961
その他友人関係を発達との関連で縦断面的に考察したものの中にはこの特性に対して考察が行われているし，それらは全て自我との関連で説明ずけられている。
5) 石崎恒次郎　現代教育社会学1956pp138～140
6) 広岡　亮蔵　９月22日N.H.K.T.Vの「親友について」
7) 古旗　安好　学友関係的要因，教育心理第14巻1959pp26～28

分と友人の関係にバランスの測り方を必要とすることがおこってくる。親友における知能年令，興味の対象，家庭の社会的経済的地位はかなり高い相関がみられると云われている。[1] とくに精神的発達の程度が同じであることが青年期の友人関係には要求されるようである。（勿論，類似性は必ずしも必要な条件ではない場合がある）

「異性の友人が欲しいが勇気がない」というのにかなり高い%がしめられている，中学の「異性との交際は誤解され干渉される」からの数量的な面での脱皮はあっても，異性との友人関係にはたえず現在の社会意識と直結するだけに悩みの生じる原因になりやすいと考えられる，とくに内部からは第二次性徴期の特性的欲求と周囲の矛盾に直面させられる部面であろう。「勇気がない」と云う語を個人の立場の問題として把握してくる場合，性格上の問題よりも異性への友人関係の求め方における意識の基盤の軟弱さに起因している場合が応々にみられる。

又社会的な条件が，いわゆる生活様式からくる習慣的圧迫は，封建下においては，女子は人間としての価値がみとめられる機会がなく，女子は好奇心の対象としての存在としかうけとられなく，それらの関係は人間的存在とは考えられなかった，自分達の行動の出発には価値を存在させ，それが，価値を否定した周囲の圧迫との間には相当の勇気が必要とされるであろう。勇気にはこのような両者の意味を含んで，関係を生じさせる障害の一つとなっている。友人，親友がないのでさびしいとうったえているものがあるが，これらの説明は以上のようなもろもろの因子との関係から生じていると考えられる。

表3 悩みの実態その3

| 学年 | 性別 | N % | 項目 / 内容 | G. 人生社会に関して | | | | | | | | H 余暇利用に関して | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | $N_1$ | 将来に希望がない | 人生はいかに生るべきかわからない | 幸福とは何か | 社会が矛盾にみちている | 何のために学問するのか | 大人を信頼できない | その他 | $N_1$ | いろ〳〵気が散てなること | 暇がなくなる | 読書のあま時間がない | スポーツにのあま時間がない | いろ〳〵の仕方がわからない | ご具合がなくらく機関やでまあ道時間 | 勉強時間がおわれない | その他 | その他 |
| 中学一・二年 | 男 | 102 | | 78 | 12 | 18 | 7 | 18 | 11 | 10 | 2 | 65 | 13 | 18 | 6 | 5 | 12 | 6 | 3 | 6 |
| | | | | 100. | 15.4 | 23.1 | 9.0 | 23.1 | 14.1 | 12.8 | 2.6 | 100. | 20.0 | 27.7 | 9.2 | 7.7 | 18.5 | 9.2 | 4.6 | |
| | 女 | 93 | | 67 | 9 | 16 | 8 | 10 | 10 | 13 | 1 | 37 | 9 | 6 | 5 | 5 | 4 | 7 | 1 | 6 |
| | | | | 100. | 13.4 | 23.9 | 11.9 | 14.9 | 14.9 | 19.4 | 1.5 | 100. | 24.3 | 16.2 | 13.5 | 13.5 | 10.8 | 18.9 | 2.7 | |
| 高校一年 | 男 | 70 | | 71 | 11 | 16 | 11 | 20 | 3 | 6 | 4 | 39 | 18 | 6 | 1 | 2 | 2 | 8 | 2 | |
| | | | | 100 | 15.5 | 22.5 | 15.5 | 28.2 | 4.2 | 8.5 | 5.6 | 100 | 46.2 | 15.4 | 2.6 | 5.1 | 5.1 | 20.5 | 5.1 | |
| | 女 | 79 | | 87 | 11 | 11 | 11 | 25 | 18 | 1 | 1 | 51 | 20 | 1 | 4 | 4 | 4 | 14 | 4 | |
| | | | | 100 | 14.1 | 14.1 | 14.1 | 32.1 | 23.1 | 1.3 | 1.3 | 100 | 39.1 | 1.8 | 7.8 | 7.8 | 7·8 | 27.5 | 7.8 | |

人生，社会に関する悩みの中で，「社会が矛盾にみちている」とこたえたものと，「人生はいかに生くべきかわからない」というのが高い%をしめしている，又女子で「何のために学問するのかわからない」に相当高率解答をしているようである。青年期に社会の矛盾を感ずることは理想と現実の距離がある以上おこることだろうが，近年の家族関係や生活習慣の違いはよけいにこれらの点に対する悩みを生じさせているようである。女子の「何のために学問をするのかわからない」にかなり高い%があることについて，男子では中学時代の後期にこのような悩みをもつものが多くなってくるようである。この説明が自分の学問の認識か，他の人のための学問か認識によっても変ってくるだろう。女子の場合には学問の結果と女子の生活像とが直結しにくい現実や学校の制度が，[2] そして学問と学校の勉強とだけの限定をした考えかたの中には，大学へはいるための勉強，就職のための勉強，それらがあまりにもはっきりした自己利害にむすびつくだけに理想を価値の最高峰においているこの年代には悩みの内容となるのであろう。

1) ・石崎恒次郎　現代教育社会学1956，pp137～138
　・依田　新　内界の探究と悩み，青年心理学講座1959p.20など。
2) 野田　一夫　婦人公論（3月号）1963で女子学生亡国論に関して文学部や家政学部のあり方に一つの提案を試みている。

余暇の利用に関しても，「いろいろなことに気が散る」，「勉強におわれて時間がない」などにかなり高い%がみられる。とくにやりたいことが思うようにできない場合，精神衛生の条件として悪い条件へおいこむことになるし，いろいろ現象をおこしているのであろう，文化の発達が「気を散らす」条件を多く生産していることも一因であろう。目標と努力の相関度が簡単なものではないだろうし，青年期の目標が大きくなればそれだけ成就感とは遠ざけ，気を散らすか，気が散っているように自己をみつめることを生じせしめるのだろう。勉強におわれて時間がないと云うのは近年小学校から増加している内容である，学習内容が豊富になったこともあるだろうが，現在の進学，就職の圧迫感がこれらの因子を表出させていると考えるのは一般的である。

このように個々の悩みの内容にはそれぞれの関連する原因があり，青年の時代にはいつもあるであろうと考えられる悩み，世代の変化がよけいにそれらを生じせしめていると思われるもの，人為的に悩みを生じさせていると考えられるもの，など，悩みの分析も縦断面的考察が必要である。

表4　悩みの分布および他校との比較

| 中高別 | 学校別 | 性別 | 記号 / 内容 / N / % | A 勉強に関して | B 健康容姿に関して | C 自分の性質に関して | D 家庭に関して | E 学校生活に関して | F 友人関係に関して | G 社会人生に関して | H 余暇利用に関して | I その他 | $N_1$ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 中学 | 本校 | 男 | 102 | 119 | 50 | 94 | 34 | 62 | 76 | 78 | 65 | 6 | 584 |
| | | | 100 | 20.4 | 10.3 | 16.1 | 5.8 | 10.6 | 13.0 | 13.4 | 11.3 | 1.1 | |
| | | 女 | 93 | 114 | 52 | 95 | 30 | 61 | 69 | 67 | 37 | 6 | 531 |
| | | | 100 | 21.5 | 9.8 | 17.9 | 5.6 | 11.5 | 13.0 | 12.6 | 7.0 | 1.1 | |
| | 東京 | 男 | 50 | 152 | 37 | 85 | 25 | 31 | 42 | 18 | 13 | | 403 |
| | | | 100 | 37.7 | 9.2 | 21.1 | 6.2 | 7.7 | 10.4 | 4.5 | 3.2 | | |
| | | 女 | 50 | 215 | 30 | 96 | 22 | 24 | 33 | 28 | 5 | | 453 |
| | | | 100 | 47.5 | 6.6 | 21.2 | 4.9 | 5.3 | 7.3 | 6.2 | 1.1 | | |
| | 神奈川 | 男 | 50 | 77 | 23 | 54 | 17 | 25 | 45 | 10 | 10 | | 261 |
| | | | 100 | 29.5 | 8.8 | 20.7 | 6.5 | 9.6 | 17.2 | 3.8 | 3.8 | | |
| | | 女 | 50 | 92 | 32 | 57 | 15 | 20 | 30 | 13 | 11 | | 270 |
| | | | 100 | 34.1 | 11.9 | 21.1 | 5.6 | 7.4 | 11.1 | 4.8 | 4.1 | | |
| | 埼玉 | 男 | 53 | 184 | 63 | 84 | 27 | 37 | 49 | 9 | 4 | | 457 |
| | | | 100 | 40.3 | 13.8 | 18.4 | 5.9 | 8.1 | 10.7 | 2.0 | 0.9 | | |
| | | 女 | 72 | 197 | 61 | 108 | 26 | 35 | 34 | 8 | 14 | | 483 |
| | | | 100 | 40.8 | 12.6 | 22.4 | 5.4 | 7.2 | 7.0 | 1.7 | 2.9 | | |
| 高校 | 本校 | 男 | 70 | 86 | 48 | 79 | 21 | 61 | 58 | 81 | 39 | 3 | 476 |
| | | | 100 | 18.1 | 10.1 | 16.6 | 4.4 | 12.8 | 12.2 | 17.0 | 8.2 | 0.6 | |
| | | 女 | 79 | 101 | 56 | 103 | 44 | 74 | 64 | 78 | 51 | 71 | 576 |
| | | | 100 | 17.4 | 9.7 | 17.4 | 7.6 | 12.8 | 11.1 | 14.5 | 8.8 | 0.1 | |
| | 大阪全日制 | 男 | 1228 | | | | | | | | | | |
| | | 女 | 100 | 13.2 | 7.1 | 14.1 | 6.3 | 10.4 | 10.5 | 15.5 | 6.7 | 0.8 | |
| | 大阪定時制 | 男 | 405 | | | | | | | | | | |
| | | 女 | 100 | 12.8 | 7.4 | 15.0 | 7.5 | 6.3 | 10.6 | 18.1 | 8.0 | 1.6 | |
| | 東大付属 | 男 | 336 | | | | | | | | | | |
| | | 女 | 100 | 30.3 | 10.0 | 14.9 | 6.6 | 10.3 | 10.4 | 7.1 | | | |

表5　本校生の悩みの順位（5位まで）及び%

| 中高 | 性別 ＼ 順位 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 中学 | 男 | 勉強 | 性質 | 人生社会 | 友人 | 余暇 |
| | | 20.4 | 16.1 | 13.4 | 13.0 | 11.3 |
| | 女 | 勉強 | 性質 | 友人 | 人生社会 | 学校生活 |
| | | 21.5 | 17.9 | 13.0 | 12.6 | 11.5 |
| 高校 | 男 | 勉強 | 人生社会 | 性質 | 学校生活 | 友人 |
| | | 18.1 | 17.0 | 16.6 | 12.8 | 12.2 |
| | 女 | 性質 | 勉強 | 人生社会 | 学校生活 | 友人 |
| | | 17.4 | 17.4 | 14.5 | 12.8 | 11.1 |

表4は本校の悩みと他校との比較である。

「勉強に関する悩み」の%は他校にくらべると少いのは，現在の選抜方法に起因しているのかもしれない，又調査対象の選び方にも問題が含まれていることも反省しなければならない。

「学校生活に関しての悩み」，「友人関係に関しての悩み」，「人生社会に関しての悩み」など他校よりやや多いようである。

学校生活に関するものには教師集団の協力によって解決できる面が多いようであるし，真の悩みを存在させることは必要なことであるが，悩みの与え方，うけとめ方にもっと研究を必要とするのではないだろうか。

表5は本校生の悩みを5位まで順序ずけたものである，高校においては男女差がみられるし，又中高の間にこの位置の変化がおこっていることに注目したい。

これらの順位の中で悩みの対象としての友人関係の位置は5位である。内容としての友人関係についてはその解決場面としての友人関係の位置との関連においてみなければならないだろう。

表6　悩みの相談者

| 記号 | 性別 ＼ 内容 N1 % ＼ 番号 | | 1 H・Rの先生 | 2 生活課の先生 | 3 1・2以外の先生 | 4 小中学時代の先生 | 5 父 | 6 母 | 7 兄弟姉妹 | 8 友人 | 9 その他 | 0 だれにも相談しない |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A 勉強 | 男 | 62 | 4 | 0 | 1 | 3 | 1 | 5 | 4 | 9 | 1 | 34 |
| | | 100.0 | 6.4 | 0 | 1.6 | 4.8 | 1.6 | 8.1 | 6.4 | 14.5 | 1.6 | 55.0 |
| | 女 | 88 | 8 | 0 | 3 | 3 | 3 | 11 | 11 | 25 | 4 | 20 |
| | | 100.0 | 9.1 | 0 | 3.5 | 3.5 | 3.5 | 12.5 | 12.5 | 28.3 | 4.5 | 22.6 |
| B 健康容姿 | 男 | 32 | 0 | 0 | 2 | 0 | 1 | 12 | 3 | 2 | 1 | 11 |
| | | 100.0 | 0 | 0 | 6.3 | 0 | 3.1 | 37.5 | 9.3 | 6.3 | 3.1 | 34.4 |
| | 女 | 57 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 17 | 5 | 8 | 0 | 25 |
| | | 100.0 | 0 | 0 | 0 | 1.7 | 1.7 | 29.9 | 8.8 | 14.1 | 0 | 43.8 |
| C 性質 | 男 | 51 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 3 | 1 | 7 | 2 | 36 |
| | | 100.0 | 0 | 0 | 0 | 2.0 | 2.0 | 5.9 | 2.0 | 13.7 | 3.9 | 70.5 |
| | 女 | 81 | 4 | 0 | 2 | 4 | 1 | 16 | 4 | 16 | 2 | 32 |
| | | 100.0 | 4.9 | 0 | 2.5 | 4.9 | 1.2 | 19.8 | 4.9 | 19.8 | 2.5 | 39.5 |
| D 家庭 | 男 | 26 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 1 | 0 | 1 | 20 |
| | | 100.0 | 3.8 | 0 | 0 | 0 | 3.8 | 7.8 | 3.8 | 0 | 3.8 | 77.0 |
| | 女 | 40 | 0 | 0 | 2 | 0 | 2 | 8 | 2 | 10 | 0 | 16 |
| | | 100.0 | 0 | 0 | 5.0 | 0 | 5.0 | 20.0 | 5.0 | 25.0 | 0 | 40.0 |
| E 学 | 男 | 54 | 1 | 0 | 1 | 2 | 2 | 0 | 1 | 11 | 2 | 34 |
| | | 100.0 | 1.8 | 0 | 1.8 | 3.7 | 3.7 | 0 | 1.8 | 20.4 | 3.7 | 63.1 |

表6から勉強についてはH.Rの先生が悩みの相談者は若干あげられているが，それ以外の内容についてはほとんど相談相手にはなっていない，（性質について女子が4.9%，人生社会について女子が4.3%などあるが……）。

生活課の先生についてはどの項目についても皆無である。これらは生活課（生活指導）がその移行において補導訓育との関連を残存させたこと，および，現在の生活指導の無目的さがこのような残影を生徒の中に存在させていること，いいかえれば生活指導の積極的働きかけの場は受験体制の中ではうばわれてしまい，その存在さえ必要でないようにとられやすい，しかし一たん事件や事故がおこると残影を表面に引き出した生活課への期待がなされるのではないだろうか。本校の生活課では，これらに対し生徒に罰則の対象としての生活課からの脱皮をめざし，生徒のはいりよい環境の工夫，あるいは個別的カンセリングルームを作りあげ，生活課本来の姿へ脱皮すべく努力をかさねているが，なかなか困難でもある。しかしこれらは生活課の内部的努力と合せて学校組織の上での生活課や生活指導に対する共通理解が保たれなければ生徒の側へはギャップとしての作用はあるにしても有効な働きかけはあまり期待できないであろう。国立教育研究所の調査によれば，「生徒

①・国立教育研究所「生徒指導の実態と問題」1958年3月
・津高正文　高校生，現代教育学　16巻1961pp259～260

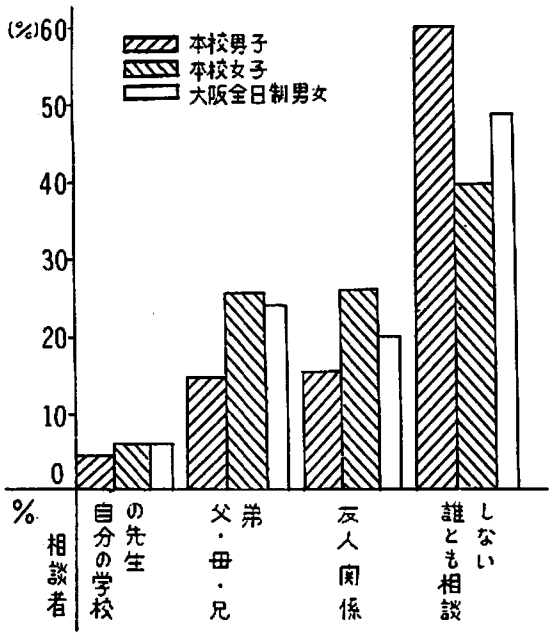
| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 校生活 | 女 | 56 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 | 3 | 16 | 2 | 30 |
| | | 100.0 | 0 | 0 | 1.9 | 0 | 0 | 7.1 | 5.3 | 28.6 | 3.6 | 53.5 |
| F 友人関係 | 男 | 44 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 8 | 2 | 31 |
| | | 100.0 | 2.3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4.5 | 18.2 | 4.5 | 70.5 |
| | 女 | 56 | 1 | 0 | 3 | 0 | 0 | 10 | 1 | 12 | 1 | 28 |
| | | 100.0 | 1.8 | 0 | 5.3 | 0 | 0 | 17.9 | 1.8 | 21.4 | 1.8 | 50.0 |
| G 人生社会 | 男 | 53 | 0 | 0 | 1 | 1 | 5 | 3 | 2 | 11 | 4 | 26 |
| | | 100.0 | 0 | 0 | 1.9 | 1.9 | 9.4 | 5.7 | 3.8 | 20.7 | 7.6 | 49.0 |
| | 女 | 70 | 3 | 0 | 1 | 1 | 4 | 15 | 2 | 16 | 3 | 25 |
| | | 100.0 | 4.3 | 0 | 1.4 | 1.4 | 5.7 | 21.4 | 2.9 | 22.8 | 4.3 | 35.8 |
| H 余暇利用 | 男 | 31 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 2 | 7 | 1 | 18 |
| | | 100.0 | 0 | 0 | 0 | 3.2 | 3.2 | 3.2 | 6.5 | 22.6 | 3.2 | 58.1 |
| | 女 | 46 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 4 | 4 | 13 | 0 | 23 |
| | | 100.0 | 0 | 0 | 0 | 2.2 | 2.2 | 8.7 | 8.7 | 28.2 | 0 | 50.0 |
| 全 | 男 | 353 | 7 | 0 | 5 | 8 | 12 | 26 | 16 | 55 | 14 | 210 |
| | | 100.0 | 2.0 | 0 | 1.4 | 2.3 | 3.4 | 7.4 | 4.5 | 15.6 | 4.0 | 59.4 |
| | 女 | 510 | 16 | 0 | 12 | 10 | 12 | 85 | 32 | 132 | 12 | 199 |
| | | 100.0 | 3.0 | 0 | 2.4 | 1.9 | 2.4 | 16.8 | 6.3 | 25.8 | 2.4 | 39.0 |

に勉強さえさせておけばよい」そうすれば生活指導の問題は全て解決すると云う考え方が全国の高校の半数あると説明されている，これらは現在の入試関係と生活指導のあり方との関連で複雑さを含んでいることを説明している。学校の先生関係への相談に比べて，家庭における相談の対象は多いようである。又それらは項目によって違うことも大きな特徴として受けとられるだろう。男女ともに健康容姿に関し母親に相談する%が高いようである。性格，家庭，友人のことに関しての母親の精神衛生的価値は大きいと云わなければならない。そしてこれらは日本の家族制度の中における位地，および青年期の権威に対する反抗と関係があるとみなければならないだろう。女子教育の高ようはこれらの価値をさらに高めてくれることを期待できるであろう。近代社会の発達は過去の社会にくらべれば家族集団から多くの機能をうばったと云われている，しかし家族員相互の異質性はますます大きくなっても，人間生活においてはその結合が強くなり，家族集団の意義はますます大きくなるといわれる。[1]そして相談者としての母親が多く信頼を得ていることは多くの研究にみられる。[2]その研究では男子において「母を好きだ」とするものの間には差がなく，女子は母を優位におくものが64.9%あるとしている，男女を通じても56.7%で母がすかれている，又「どちらがえらいか」との問いには父だと答えるものが多く，「どちらがありがたいか」との問いには母親をあげていると説明されている。これらの事情が悩みの相談者としての位地すけをするものとみられる。しかしこれらの位地を友人関係の位地の移行により，とくに青年期にはこの家族の悩みの相談者としての位地も変化[3]してくると考えられる。友人が相談者にして有効な指数にあることは表6によっても明かである。家庭の問題や学校のとくに先生や，学校のあり方に関する問題，人生社会に関することには有効なのであろう。互いに独立した人格者として，自主的に交際できるこの条件は重要な人間形成の条件であろう，「だれにも相談しない」の%が高いことも今までの相談者の実情と関連をもちながら注目しなければならない点である。男子において「自分の性質に関しては男子で70%強，家庭に関しても男子は7%，学校生活では63.1%友人関係では男女ともに50〜70%，とかなり高い率を示している。これらの原因と結果の考察には多くの点からの究明を必要とされる，原因についても，理想と現実にその距離感がなくなったのか，それとも距離感の認識はあっても，解決をしたいと思わないのか，とくに後者の条件は何か，もっと明らかにする必要があろう。自分の性質について，もともと人間関係においては気質まで通じあう友人関係[4]の獲得がむずかしいことを感じられる。学校における孤立現象[5]も，これら誰にも相談しないと云う%を高めていることになろう。

又これを「悩みが存在しないからではないか，悩みを意図的に与える必要があるのではないか」[6]という意見もあることにも留意する必要があろうが，先ほどのべた距離感の認識がなくなったのだとしたら，青年期を幼児的過し方をした成人の社会的不適応を考えないでいいのであろうか，情緒的結びつきの観察さがなくても，自分の比較的内面的なことまでさらけ出しつゝある現代の特性（私的なことを他人の前にさらけ出すものではないといった社会通念が現

1) 大西誠一郎，家族間の緊張　青年心理学講座 3 1959, pp87〜88
2) 大西誠一郎は。辻正三，児童を通じてみた家庭の力動的構造に関する研究，1952pp12〜21。教師養成研究会青年心理学，1953, pp145〜146などをあげ説明している。
3) 大西誠一郎　親子間の緊張と葛藤　青年心理学1959. p103, pp108〜109
4) 青井　和夫　小集団の構造と機能，今日の社会心理学1962PP. 33〜34
5) 小川　利夫　青年の生活と問題，現代教育学第16巻P. 39
6) 第2回高等学校研究大会において，本校生の悩みにおける学友関係的要因の一考察の発表（横山）に対し名古屋大学付高よりの質問

グラフ1．悩みの相談者の比較




在では欲求，私的考え方に変化がおこっていること，学校においても正しい人間関係の促進の営みの効果は，先生に自分のことを平気で大声で話しをするといった風潮，とくに異性の友人のことでそれを表面化した会話の機会にのせるものが多いが……など）との関連でもながめる必要であろう。しかし悩みを持ち，それが内部で不適応現象の条件になりやすいものを含んでいるとしたら高校教育の大きな問題点だろう。

悩みの内容における友人関係的もの，相談者としての友人関係の意義は非常に大きいといわなければならない。

又教育的意義についても多くの研究がある，青年発達において，近代社会の人間の理念的な社会形成と現在の社会要求との交叉場面として経験することは大切なことである，

その他もろもろの有効な指数[1]をもち合せている。

友人関係の中で親友の影響はその性格形成にある意味で重要な働きがあるようである。

そしてその親友関係の人数が2～4名内外のもので，これ以上拡大することがその結合の条件がわるくなると云われる，又男子では中学と高校との間に，女子では中学1・2年と中学3年以上との間にあきらかに差異がみとめられる[2]という。これらを本校の実態把握の視点の一つにしてみたい。

### ② 友人関係の実態

現在同じ学年に友人があるか，ないか，について調査したものが表7である。高1，97%から高3の96%まで男子より女子の方が友人のあると答えている者の数は多いが，何らかの結びつきをもった友人が存在していることをしめしている。

友人関係の生じる原因は発達段階によって違うようである。次に情緒的結びつきを考察してみると表8のようである。高1と高2.3との間に男女ともに大きな広きがあるようである。これは1年の機会の未熟さ，高2の中堅的活動さ，高3の精神的安定さなどの影響も一部はあるだろう。親友，知人，場の共有者などの概念規定には，親友として，「自分の悩み，ほんとうに理解し，ともに悲しみ，ともに喜んでくれるし，お互いを本当に信頼しあっている，いわゆる親友の間柄である」，知人として「一緒に学校にきたり，休み時間に一緒にスポーツをしたりするが，内面的なことはお互い全然ふれない，この間も私が困ったときに助けてくれなかったが私もそんなことはあまり気にしていない，学校で，一緒に行動することは多い」，場の共有者として「クラスや学年が一緒だから会ったら話しはするが，自分の方から積極的に話しかけない，勉強でわからないときなどたまにきくことはある。まあ同じクラス（学年）という以外特別親しみはない」という規定を一応もうけた。男子の方は選択条件がきびしいとみえて親友の%は女子に比べたら低い，その他の内容として親友と知人の中間的関係というのが多い。これはこちらの択一式をとったので，このようなその他があらわれたと思われる，なお親友と知人をもちあわせているものは親友だけをあげたのでこれ以上に情緒的結びつきの薄い層の%は高まると考えられる。親友が50%近くあり（とくに女子には80%近くあるが）悩みの相談者としての位地はある程度保たれていると考えていいであろう。とくにこの学校では親友の条件となる知能指数や経済的条件，それに精神的発達についてもある程度の共通性をもちあわせている。とくに知能指数など全体に高い。グラフ3は親友の人数をあらわしたものである。今まで人数は2人から3人と云われていたのも大

① 石崎恒次郎　現代教育社会学　1956，pp146～157
② 望月　衛　青年心理学　1951pp72～73

表7. 同学年に友人があるか

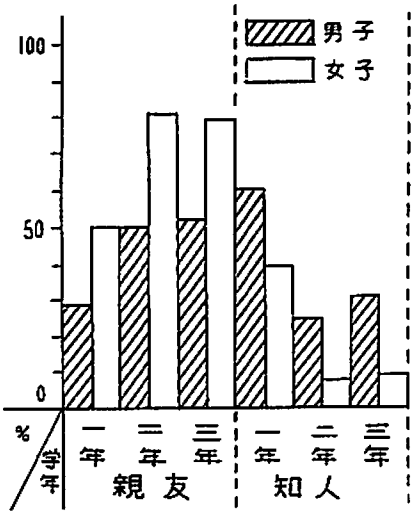
| 性別 | 学年 | N / % | ある | ない | 無不記明 |
|---|---|---|---|---|---|
| 男子 | 1 | 69 | 67 | 2 | 0 |
| | | 100 | 97.0 | 3.0 | 0 |
| | 2 | 65 | 60 | 5 | 0 |
| | | 100 | 92.0 | 8.0 | 0 |
| | 3 | 59 | 55 | 4 | 0 |
| | | 100 | 93.2 | 6.8 | 0 |
| 女子 | 1 | 76 | 75 | 1 | 0 |
| | | 100 | 98.7 | 1.3 | 0 |
| | 2 | 73 | 71 | 2 | 0 |
| | | 100 | 97.6 | 2.4 | 0 |
| | 3 | 78 | 77 | 1 | 0 |
| | | 100 | 98.8 | 1.2 | 0 |
| 男女 | 1 | 100 | 97.0 | 3.0 | 0 |
| 男女 | 2 | 100 | 97.0 | 3.0 | 0 |
| 男女 | 3 | 100 | 96.0 | 4.0 | 0 |
| 合計 | | 420 | 405 | 15 | 0 |
| | | 100 | 97.0 | 3.0 | 0 |

表8. 友人関係の内容

| 性別 | 学年 | N / % | イ 親友 | ロ 知人 | ハ 共有の場の者 | ニ その他 | 無不記明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男子 | 1 | 67 | 19 | 40 | 4 | 3 | 1 |
| | | 100.0 | 28.0 | 60.0 | 6.0 | 4.0 | 2.0 |
| | 2 | 60 | 30 | 16 | 4 | 9 | 1 |
| | | 100.0 | 50.0 | 26.6 | 6.7 | 15.0 | 1.7 |
| | 3 | 55 | 29 | 18 | 4 | 2 | 2 |
| | | 100.0 | 53.5 | 32.5 | 7.2 | 3.4 | 3.4 |
| 女子 | 1 | 75 | 38 | 29 | 0 | 6 | 2 |
| | | 100.0 | 50.7 | 38.6 | 0 | 8.0 | 2.7 |
| | 2 | 71 | 58 | 5 | 0 | 8 | 0 |
| | | 100.0 | 82.0 | 7.0 | 0 | 11.0 | 0 |
| | 3 | 77 | 60 | 7 | 1 | 6 | 3 |
| | | 100.0 | 78.1 | 9.1 | 1.3 | 7.8 | 3.8 |
| 男女 | 1 | 142 | 57 | 69 | 4 | 9 | 3 |
| | | 100.0 | 40.2 | 48.6 | 2.8 | 6.3 | 2.1 |
| 男女 | 2 | 131 | 88 | 21 | 4 | 17 | 1 |
| | | 100.0 | 67.0 | 16.0 | 3.2 | 17.0 | 0.8 |
| 男女 | 3 | 132 | 89 | 25 | 5 | 8 | 5 |
| | | 100.0 | 67.2 | 18.9 | 3.9 | 6.1 | 3.9 |
| 合計 | | 403 | 234 | 115 | 13 | 34 | 9 |
| | | 100.0 | 58.0 | 28.3 | 3.2 | 8.4 | 2.2 |

きな違いはないが4人にかなりの%が示されていることなど新しい意識の発現とみていい場面だろう。高2，高3の女子に4人グループが多いようである。5人グループについても高2は16.1%もあるが，小集団研究の定義や，その他の機能（－In interaction」などの面からも6人以上の親友が不可能なことは説明がなされている。グラフ4と表9から情緒的結びつきの内容によって人数のワクが広がっていくことがうかがえる。これらの関係

グラフ2




グラフ3

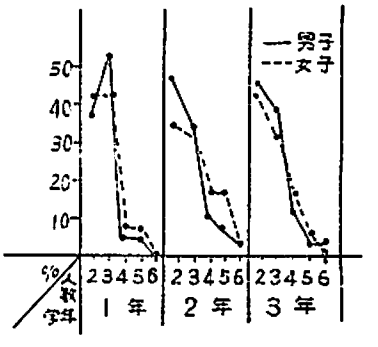


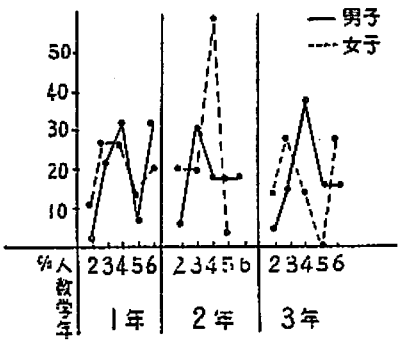
表8. 親友の人数

| 性別 | 学年 | 内容 N1 % | 2 人 | 3 人 | 4 人 | 5 人 | 6人以上 | 無記不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男子 | 1 | 19 | 7 | 10 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| | | 100 | 37.0 | 53.0 | 5.0 | 5.0 | 0 | 0 |
| | 2 | 30 | 14 | 10 | 3 | 2 | 1 | 0 |
| | | 100 | 46.5 | 33.5 | 10.0 | 6.7 | 3.3 | 0 |
| | 3 | 29 | 13 | 11 | 3 | 1 | 1 | 0 |
| | | 100 | 45.0 | 38.0 | 12.0 | 3.5 | 3.5 | 0 |
| 女子 | 1 | 38 | 16 | 16 | 3 | 3 | 0 | 0 |
| | | 100 | 42.1 | 42.1 | 7.9 | 7.9 | 0 | 0 |
| | 2 | 56 | 19 | 17 | 9 | 9 | 2 | 2 |
| | | 100 | 34.0 | 30.6 | 16.1 | 16.1 | 3.6 | 3.6 |
| | 3 | 60 | 29 | 18 | 10 | 3 | 0 | 0 |
| | | 100 | 40.5 | 30.0 | 16.6 | 5.0 | 0 | 0 |
| 男女 | 1 | 100 | 40.5 | 45.5 | 7.0 | 7.0 | 0 | 0 |
| 男女 | 2 | 100 | 37.5 | 30.8 | 13.6 | 12.4 | 3.4 | 2.3 |
| 男女 | 3 | 100 | 47.4 | 32.8 | 14.7 | 4.6 | 0.5 | 0 |
| 合計 | | 234 | 98 | 82 | 29 | 19 | 4 | 2 |
| | | 100 | 42.5 | 35.0 | 12.4 | 8.0 | 1.7 | 0.9 |

表9. 知人の数について

| 性別 | 学年 | 内容 N1 % | 2 人 | 3 人 | 4 人 | 5 人 | 6 人 | 無記不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男子 | 1 | 40 | 1 | 9 | 13 | 3 | 13 | 1 |
| | | 100 | 2.5 | 22.5 | 32.5 | 7.5 | 32.5 | 2.5 |
| | 2 | 16 | 1 | 5 | 3 | 3 | 3 | 1 |
| | | 100 | 6.3 | 31.3 | 18.7 | 18.7 | 18.7 | 6.3 |
| | 3 | 18 | 1 | 3 | 7 | 3 | 3 | 1 |
| | | 100 | 5.5 | 16.7 | 38.9 | 16.7 | 16.7 | 5.5 |
| 女子 | 1 | 29 | 3 | 8 | 8 | 4 | 6 | 0 |
| | | 100 | 10.2 | 27.6 | 27.6 | 13.8 | 20.7 | 0 |
| | 2 | 5 | 0 | 1 | 1 | 3 | 0 | 0 |
| | | 100 | 0 | 20.0 | 20.0 | 60.0 | 0 | 0 |
| | 3 | 7 | 1 | 2 | 1 | 0 | 2 | 1 |
| | | 100 | 14.3 | 28.6 | 14.3 | 0 | 28.6 | 14.2 |
| 男女 | 1 | 100 | 5.9 | 24.6 | 30.5 | 1.0 | 22.5 | 1.5 |
| 男女 | 2 | 100 | 4.8 | 28.6 | 19.0 | 28.6 | 14.3 | 4.8 |
| 男女 | 3 | 100 | 8.0 | 20.0 | 32.0 | 12.0 | 20.0 | 8.0 |
| 合計 | | 115 | 7 | 28 | 33 | 16 | 27 | 4 |
| | | 100 | 6.2 | 24.3 | 28.5 | 14.0 | 23.5 | 3.5 |

グラフ4　知人の人数




にとって個人が何らかの利害関係をもち得るのはやはり6～7名位であると云う説明[1]にも耳をかたむける必要があるだろう。（勿論 formal な group と informal な gronpの中間的人数の規定は明確ではないが）。表10は親友，知人の中に異性が人数としてどれ位含まれているかを調べたものである。男女両性の正しい理解と云う点に関しては共学制度は有効であったようである。「好奇心よりも人間として尊重すること，社会の中で両者の正しい協力関係が必要であること，現在と将来の男女の人間像の認識の上に立ち，現在を正しく理解し能力の適正を考えてそれを社会へ向けて貢献できるようにしていく」ことが，現在の高校生の意識になりつゝあると考えてよいであろう。それらは統計的上にも親友関係の中にも異性を含んでいるという事実がその説明の一翼をになうことになるだろう。フォークダンス，歌う会，それに教科学習における相互作用は云うに及ばず，人間的接触をもっていることは正しい姿として指導の上にのせてやる必要があろう。正しい科学的理解は好奇心のはいる余地を与えないだろうし，人間の正しい理解はやはり両性の協力を必要とすると考える。人間科学が成立するとすれば，ますますこの点は強張されるであろう。これは我々が，個人差や，性差の尺度と同一化したり，差異を優劣に結びつけたり，罪悪に結びつけたりすることへの一つの反省にしなければならないだろう。

表11は頻数は少いのであるが，親友や知人がどの程度，自分の周囲との関連で，人間的確立がなされているかをみたものである。結果は移行期的結果としては好ましい状態と云えよう。37%強（頻数は少いが）もある「あまり意識しない」「全然意識しない」は今後の指導の参考資料として生かしていけるようである。知人についても24.1%ある（頻度が少いので統計的処理とそれの考察には相当慎重なとりあげかたをしなければならないが……）。

友人がない人に関する解答数は少い(表7からわかるが…)ので内容を参考のために列挙してみたい。「友人が欲し

①青井　和夫，小集団の構造と機能，今日の社会心理学，1962pp4～5

表10　親友，知人の中に異性が含まれるか

| 性別 | 学年 | N | 親友 N1 % | 含まれている | 含まれていない | 無記不明 | 知人 N1 % | 含まれている | 含まれていることもある | 含まれていない | 無記不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男子 | 1 | 67 | 19 | 4 | 15 | 0 | 39 | 7 | 4 | 26 | 2 |
| | | | 100 | 21.0 | 79.0 | 0 | 100 | 18.0 | 10.1 | 66.9 | 5.0 |
| | 2 | 60 | 30 | 5 | 23 | 2 | 15 | 2 | 6 | 7 | 0 |
| | | | 100 | 16.7 | 76.7 | 16.6 | 100 | 13.3 | 40.0 | 46.7 | 0 |
| | 3 | 55 | 29 | 5 | 24 | 0 | 17 | 1 | 2 | 14 | 0 |
| | | | 100 | 17.2 | 82.8 | 0 | 100 | 5.8 | 11.8 | 82.4 | 0 |
| 女子 | 1 | 75 | 38 | 2 | 35 | 1 | 29 | 0 | 5 | 24 | 0 |
| | | | 100 | 5.3 | 92.1 | 2.6 | 100 | 0 | 17.2 | 82.8 | 0 |
| | 2 | 71 | 54 | 6 | 45 | 3 | 5 | 1 | 0 | 4 | 0 |
| | | | 100 | 11.1 | 83.0 | 5.9 | 100 | 20.0 | 0 | 80.0 | 0 |
| | 3 | 77 | 60 | 7 | 51 | 2 | 6 | 0 | 1 | 4 | 1 |
| | | | 100 | 11.6 | 85.0 | 3.4 | 100 | 0 | 16.7 | 66.7 | 16.6 |
| 男女 | 1 | 142 | 100 | 13.3 | 88.0 | 1.7 | 100 | 10.2 | 13.3 | 73.6 | 2.9 |
| 男女 | 2 | 131 | 100 | 12.8 | 79.5 | 7.7 | 100 | 15.0 | 30.0 | 55.0 | 0 |
| 男女 | 3 | 132 | 100 | 13.6 | 84.1 | 2.3 | 100 | 4.3 | 13.0 | 78.3 | 4.4 |
| 合計 | | 403 | 232 | 29 | 193 | 10 | 111 | 11 | 18 | 80 | 2 |
| | | | 100 | 12.5 | 88.2 | 4.3 | 100 | 9.9 | 15.2 | 72.0 | 1.9 |

いか」の問に対し「欲しいときもある」に46.7%（N＝7）「非常に欲しい」，26.7%（N＝4）などの内容をあらわしている。女子については「非常に欲しい」の内容が多い。友人の情緒的面に対する期待については90.9%（N＝10）が親友を求めている。友人の人数はどれ位がいいと思うかの問に対して，54.5%（N＝6）が2人，27.3%(N＝3)が3人をあげている，これは親友関係との関連でみるとらなずけるところである。親友の異性に関する問題については「どちらでもよい」というのが50.0%(N＝5)「同性の方がよい」が30%（N＝3）「異性の方がいい」が20%（N＝2)といった内容になっている。

現在友人がなくて，これからも友人が必要でないと答えている者の理由は「他の連中も親友といっいるが本当の親友なんてあるわけがない，お互いお世辞をいうより一人の方がよい」という懐疑的な内容である。

現在のこのような友人関係の実態に対し，これらがどこで，どのように営まれているのかと明かにし，教育的営みとしての具体化をはかる必要が生じてくる。

## ——〔II〕——

小学校，中校校初期では学校内の条件より学校外の，他律的（地理的条件など）なものに作用されやすいだろう。中学，高校では友人関係の内容自体の複雑さ，変化がそれらの条件以外に自律的というか，自己の内面の接触を必要とさせるようになる，そしてそれらが学校のとくに年令的，その他の面で平等な条件に近いということが，友人関係の有効な場であることが明かにされている。

Lewinの Group dynamic の理論や実験はこれらを集団との関連でとらえるべきことを教えてくれている，Psyche-group や Soico group の友人関係促進の実態やこれらに関係する諸因子の究明が学校教育の有効な場を知ると云う意味からも必要になってくる。

Psyche-group としてはここでは一応clubをとりあげ，Socio-group

表11　親友，知人における異性の存在について

| 性別 | 学年 | 親友 N1 % | つねに意識する | 意識とするもある | 意識ありなし | 全然意識しない | 無記不明 | 知人 N1 % | 同性と合同場 | 同じこと | 違うこと | 違うこと | 全然違う | 無記不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男子 | 1 | 4 | 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 11 | 1 | 9 | | | 1 | 0 |
| | | 100 | 0 | 25.0 | 75.0 | 0 | 0 | 100 | 9.1 | 81.8 | | | 9.1 | 0 |
| | 2 | 5 | 1 | 2 | 1 | 1 | 0 | 8 | 2 | 6 | | | 0 | 0 |
| | | 100 | 20.0 | 40.0 | 20.0 | 20.0 | 0 | 100 | 25.0 | 75.0 | | | 0 | 0 |
| | 3 | 5 | 2 | 1 | 2 | 0 | 0 | 3 | 1 | 2 | | | 0 | 0 |
| | | 100 | 40.0 | 20.0 | 40.0 | 0 | 0 | 100 | 33.2 | 66.7 | | | 0 | 0 |
| 女子 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 5 | 2 | 3 | | | 0 | 0 |
| | | 100 | 0 | 50.0 | 50.0 | 0 | 0 | 100 | 40.0 | 60.0 | | | 0 | 0 |
| | 2 | 6 | 0 | 5 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | | | 0 | 0 |
| | | 100 | 0 | 83.3 | 16.7 | 0 | 0 | 100 | 100 | 0 | | | 0 | 0 |
| | 3 | 7 | 1 | 2 | 3 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | | | 0 | 0 |
| | | 100 | 14.3 | 28.6 | 42.8 | 14.3 | 0 | 100 | 0 | 100 | | | 0 | 0 |
| 男女 | 1 | 6 | 0 | 33.3 | 66.7 | 0 | 0 | 16 | 18.8 | 75.0 | | | 6.2 | 0 |
| 男女 | 2 | 11 | 9.1 | 63.6 | 18.2 | 9.1 | 0 | 9<br>100 | 33.3 | 66.7 | | | 0 | 0 |
| 男女 | 3 | 12<br>100 | 25.0 | 25.0 | 41.7 | 9.3 | 0 | 4<br>100 | 25.0 | 75.0 | | | 0 | 0 |
| 合計 | | 29 | 4 | 12 | 11 | 2 | 0 | 29 | 7 | 21 | | | 1 | 0 |
| | | 100 | 13.4 | 41.4 | 37.9 | 6.9 | 0 | 100 | 24.1 | 72.4 | | | 3.5 | 0 |

としては Home-room を比較の便ぎ[1]上からとりあげる。「これら group の規準を指導上の方法の基礎として使用せよ」という R.Schoring の言に耳をかたむけながら……。

表8，9と関連して集団場面への考察対象について若干基礎的資料としてあげたものが表12,13,14である。友人の数について7人以上というのに男子が多いことが特筆すべきことであろう。

これは表8，9の調査対象と違うためと，この学年のとく付属中学出身者については中学時代の group-workの意図的努力の結果とも受けとれる。(グループがきまりきっていて孤立者がでることがありその責任がグループづくりにあるようにとられている，孤立者をグループの内にいれる努力はあまりはらわれない）もし情緒的結びつきなどとの関連でも7人集団が存在するとすれば，又それらが好的指数を示すとすれば，これらのプログラムは指導に実験結果として生かせるであろう。

表12 親しい友人の数

| 性別＼人数 | N<br>% | 2人 | 3～4人 | 5～6人 | 7人以上 |
|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 68<br>100.0 | 13.2 | 26.5 | 25.0 | 35.3 |
| 女 | 71<br>100.0 | 5.6 | 40.8 | 33.8 | 19.8 |

表13 親しい友人の性別

| 性別＼内容 | N<br>% | 同性だけ | 同性を含む異性 | 異性だけ |
|---|---|---|---|---|
| 男 | 68<br>100.0 | 97.0 | 3.0 | 0 |
| 女 | 71<br>100.0 | 85.9 | 14.1 | 0 |

表14 友人との話しの内容はどんなことか（主に）

| 性別＼内容 | $N_1$<br>% | 趣味について | 異性について | 学習について | 学校生活について | 雑談 | 友人について | クラブ活動について | 政治について | 遊びについて | 何でも話合う | 家庭のこと | なやみについて | 自己の生活について | きまっていない | 日常生活のできごと | 無記不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 134<br>100.0 | 14.9 | 9.0 | 18.7 | 4.5 | 8.2 | 6.7 | 8.2 | 2.3 | 5.3 | 9.0 | 0 | 0 | 0.7 | 8.2 | 2.3 | 3.0 |
| 女 | 123<br>100.0 | 8.3 | 6.0 | 28.0 | 6.0 | 1.6 | 11.4 | 4.6 | 0.8 | 1.6 | 12.9 | 13.6 | 3.0 | 0 | 1.6 | 0.8 | 0 |

表15 親しくなった理由（%）

| 理由分類＼内容＼性別 | 自律的条件 | | | | | | | | | | 他律的条件 | | | | | | | | その他 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | $N_1$ | クラブが同じ | 気があう | 趣味が同じ | おもしろいから | 尊敬していたから | 友達の友達だから | 自分から友達になってくれるようなたのんだ | 学級に友達がないので | 相手が理解できる | グループが一緒 | $N_1$ | 地理・交通関係 | クラスが一緒だから | 講座が同じだから | 座席が近い | 出席番号の関係で | △入学当時親切にされたので | 外部からはいったので | $N_1$ | 以前からの知り合い（小・中） | 学習の助け合い | なんとなく | 先輩 | 自分と対称的性格から | $N_1$ | わからない | 無記不明 |
| 男 | 96 | 5<br>1.0 | 2<br>2.9 | 3<br>3.6 | 8.4 | 1.0 | 2.1 | 0 | 0 | 0 | 1.0 | 55 | 52.8 | 27.3 | 5.5 | 12.6 | 0 | 1.8 | 0 | 71 | 80.3 | 2.8 | 1<br>6.9 | 0 | 0 | 13 | $N_1=9$ | $N_1=3$ |
| 女 | 52 | 4<br>0.4 | 2<br>3.0 | 9.8 | 1<br>9.2 | 1.9 | 0 | 1.9 | 1.9 | 1.9 | 0 | 61 | 49.2 | 9.8 | 4.9 | 24.7 | 1.6 | 3.2 | 6.6 | 98 | 75.5 | 1.0 | 1<br>9.4 | 3.1 | 1.0 | 7 | $N_1=4$ | $N_1=3$ |
| 分類別 | 32.7 | | | | | | | | | | | 25.6 | | | | | | | | 37.3 | | | | | | | 4.4 | |

① この分類は H.H.Jennings や京大石井完一郎氏「少年補導」の分類による，又club.，Home-room をソシオメトリー実施の限界と制約から村田宏雄他の社会調査の技術は Psyche-group としている。

表14は友人の情緒的結びつきの程度を話しの内容から判断することで言葉の上で「親しい友人」と云う規定とどのような関連をもっかについて調べたものである。

男子では「学習について」，「趣味について」の%が高く，女子では「学習について」「家庭のこと」，「何でも話合う」など低学年では迫った内容で内面的接触が行われていると断判できるだろう。

表15は親しくなった理由がどのようなものであるか，既述の環境的条件やgroupの位地を知るためのものである。調査の時期や，学年の構成の関係から以前からの知りあいと云うのが男女とも多い，それについで「club が同じ」「地理，交通関係」「気が合う」などPsyche，Socio、groupなどの影響の大きいことがうかがえる。表15と関連してとくに入試に関連して外部入学者の女子で，外部入学者だけで友人関係が維持されていることは club，Home-room いずれの取扱いにしても現在の学校教育のあり方，及び学習に対する利害が友人関係の相当強度の因子になっているとすれば，これらを全体的融和の前提とすることが困難なのかもしれない，とくに観察法によれば，高学年に進むにしたがい，このgroupのあり方が学年の動きに多くの影響を与えること，又その種の結合した集団の凝集性が高まることが観察される。これらが group-work としての望ましい態度育成にむけられるよう指導が生かされるべきであるが，他の集団への影響の仕方に注目する必要があるだろう。

表18，19はclass及びclubがどれほど集団の帰属性をもつかについて%であらわしたものである。いずれも「同異クラス」，「同異クラブ」が相当高い，これについては今後活動の継続を含めて変化をみる必要があろう。以上のような集団の特性を前提にし，第1次と第2次の調査において物理的時間の経過の他に，「教育実習」「夏期休暇中の旅行」「スクールキャンプ」「水泳大会」「学園祭」「ファンシーパレード」，「体育大会」「生徒会役員選挙」「クラブ夏期練習」，「クラブ合宿」「各休み時間」その他学校教育の中で意図的にプログラムがつくりあげられている，これらの経験を通すことにより，それらがどのような変化をするかについて，ソシオメトリーを用いて測定したものである。

表16　外部入学者の親しくなった理由

| 性別＼内容 | N1 % | クラブ活動で | 出身学校の関係で | 趣味が同じ | なんとなく | クラスが一緒 | 地理的条件 | 入学式のとき | 講座が同じ | 外部からきているので |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 35 100.0 | 17.1 | 25.7 | 5.7 | 8.6 | 20.0 | 8.6 | 2.9 | 11.4 | |
| 女 | 58 100.0 | 20.7 | 19.0 | 6.9 | 8.6 | 8.6 | 20.7 | 5.2 | 5.2 | 5.2 |

表17　外部からの入学者の学友関係の現状について

| 性別＼内容 | N1 % | 外部だけ | 内外とも | 内だけ | なし |
|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 13 100.0 | 15.4 | 69.2 | 7.7 | 7.7 |
| 女 | 19 100.0 | 31.5 | 63.2 | 5.3 | 0 |

表18　クラスと友人関係

| 性別＼内容 | N1 | 同クラス | 同・異クラス | 異クラスだけ |
|---|---|---|---|---|
| 男 | 68 100.0 | 27.9 | 63.3 | 8.8 |
| 女 | 71 100.0 | 14.0 | 76.1 | 9.9 |

表19　クラブと友人関係

| 性別＼内容 | N1 % | 同クラブ | 同・異クラブ | 異クラブだけ | なし |
|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 68 100.0 | 11.8 | 69.1 | 16.2 | 2.9 |
| 女 | 71 100.0 | 12.7 | 64.8 | 22.5 | 0 |

表20と21は集団における特性の変化を比較したものである。Home-room では第1次よりも第2次が凝集性，をはじめとしてあらゆる集団的機能が上昇していることがうかがえる。又 H ome-room間の特性があらわれている。これらが何に起因するのか，とくに教師と生徒の interactionによるのか，しかもそれが民主的に，専制的に，放任的におこなわれたかなど高校期の Home-room 運営に多くの参考資料を提供してくれるであろう。

clubにおいても男子のテニス，バレーボール，新聞，女子のテニス，ワンゲル，演劇など，凝集性の変化をしめしている。この資料に牽引し（attraction）に反撥（repulsion）の両面のとらえかたに欠けているが，多くの club についていえることは，Sociogram の結果から，これらはほとんど「pairs や「traingles」であり「Stars」ではない。そ

れはいいかえれば，Leadershipのとられない状態が存在していることがうかがえる，とくに同年令であり，目的集団までの進展がむずかしいなどの条件がLeaderの生じる要素を欠かせる方向へむけていると考えられる。group自体民主的運営[1]，自由放任的運営がそのような状態を生じせしめているのが，真の民主的運営への過度期現象なのか，共通目標が作られないほど，個性発現が充分でないのか，leaderが育ちえないということは一つの研究課題である。しかしleader-shipがprogramや集団の凝集性と関係があるとする考え方には集団を有効なかたちで学校教育の中で活用していこうとする場合leadership（民主的な）をもったものの育成に努力する必要があろう。又人間形成の努力がはらわれないとR.M Stogdill，のいう能力（知性，機敏さ，発言能力，独創性，判断力）(2)業績（学識，知識，体力）(3)責任感（頼もしさ，主導性，忍耐力，攻撃性，自信，他に優越しようとする欲求，(4)参加態度（活動力，社交的能力，共働性，適応性，ユーモアの感覚）(5)地位（ソシオメトリックな地位，人気，）などやC,A,gibb，の研究[2]による(1)精力的，(2)自信の強さ，(3)知性，(4)雄弁，(5)首尾一貫した態度，(6)人間性への洞察力[3]など育てることは困難であろう。勿論全体から遊離されたleaderの養成[4]ということについて根本的な吟味も必要であるだろうが…。友人関係が高校期になると内面的触接が必要になる，その内面的接触の場としてこれらPsyche-groupとしてのclub，Socio-gronpとしてのHome-roomいずれもその集団の構造やふんいき，および実際上の運営はそのmenberのiuteractionに大きな影響をおよぼすと考えなければならない。37年12月の新しい調査によれば視点をここになげかけてくれるようである。

表20　ホーム・ルーム，クラブ集団の特性

| 分類 | 集団名 | 内容性別 | 第1次（36年6月） N人数 | R一対数 | C選択総数 | E平選択均数 | I相指互作用数 | C。凝指集性の数 | 第2次（36年10月） N人数 | R一対数 | C選択総数 | E平選択均数 | I相指互作用数 | C。凝指集性の数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学級集団 | A | 男 | 24 | 14 | 105 | 4.4 | 19.0 | 0.05 | 49 | 35 | 212 | 4.3 | 9.01 | 0.03) |
| | B | | 23 | 17 | 115 | 5.0 | 22.7 | 0.07 | | | | | | |
| | C | | 23 | 15 | 95 | 4.1 | 18.8 | 0.06 | 48 | 42 | 247 | 5.1 | 10.9 | 0.04) |
| | A | 女 | 25 | 14 | 78 | 3.1 | 13.0 | 0.05 | | | | | | |
| | B | | 25 | 18 | 97 | 3.9 | 16.2 | 0.06 | 48 | 25 | 217 | 4.5 | 9.4 | 0.02) |
| | C | | 25 | 9 | 87 | 3.5 | 14.5 | 0.03 | | | | | | |
| クラブ | 水泳 | 男 | 6 | 3 | 8 | 1.3 | 26.6 | 0.2 | 5 | 1 | 6 | 1.2 | 30.0 | 0.1 |
| | 柔道 | | 5 | 0 | 2 | 0.4 | 10.0 | 0 | 5 | 0 | 4 | 0.8 | 20.0 | 0 |
| | 陸上 | | 5 | 4 | 8 | 1.6 | 40.0 | 0.4 | 6 | 3 | 9 | 1.5 | 30.0 | 0.2 |
| | 卓球 | | 7 | 3 | 7 | 1.0 | 16.7 | 0.1 | 6 | 2 | 6 | 1.0 | 20.0 | 0.1 |
| | テニス | | 8 | 2 | 11 | 1.4 | 17.8 | 0.1 | 8 | 4 | 14 | 1.8 | 25.0 | 0.1 |
| | バスケット | | 3 | 0 | 1 | 0.3 | 16.6 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

1) ㋐ 豊沢　登　新しい生活指導の技術，1954，pp126～142
㋑ 日本グループ・ダイナミックス学会編，グループダイナミックスの研究，第2集1955pp19～26
㋒ 青井和夫，小集団の構造と機能，1962pp24～25
2) ㋐ 青井　和夫　小集団の構造と機能，1962pp65～66
㋑ 大橋　幸　リーダーシップ，1962pp301～304
3) 大橋　幸，リーダーシップ，1962pp308～316
4) ヘッドシップと同一視すると危険を伴う。大橋幸，リーダーリップ1962pp303～304

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 集団 | 野球 | | 8 | 13 | 37 | 4.6 | 66.1 | 0.5 | 8 | 14 | 38 | 4.8 | 67.9 | 0.5 |
| | ワンゲル | | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | バレーボール | | 7 | 2 | 6 | 0.9 | 14.3 | 0.09 | 8 | 5 | 13 | 1.6 | 23.2 | 0.2 |
| | テニス | 女 | 14 | 12 | 35 | 2.5 | 19.2 | 0.1 | 13 | 16 | 34 | 2.6 | 21.8 | 0.2 |
| | 卓球 | | 6 | 1 | 6 | 1.0 | 20.0 | 0.1 | 5 | 1 | 4 | 0.8 | 20.0 | 0.1 |
| | バスケット | | 6 | 3 | 9 | 1.5 | 30.0 | 0.2 | 6 | 2 | 8 | 1.3 | 26.7 | 0.1 |
| | バドミントン | | 8 | 3 | 11 | 1.4 | 19.6 | 0.1 | 7 | 1 | 4 | 0.6 | 9.5 | 0.1 |
| | ワンゲル | | 4 | 1 | 3 | 0.8 | 25.0 | 0.2 | 4 | 2 | 4 | 1.0 | 33.3 | 0.3 |
| | 新聞 | 男 | 3 | 0 | 2 | 0.7 | 33.4 | 0 | 4 | 1 | 6 | 1.5 | 50.0 | 0.2 |
| | 演劇 | | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 1 | 4 | 0.8 | 20.0 | 0.1 |
| | 英語 | | 3 | 0 | 1 | 0.3 | 16.7 | 0.13 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 音楽 | | 8 | 4 | 9 | 1 | 25.0 | 0.2 | 5 | 2 | 5 | 1.0 | 25.0 | 0.2 |
| | 演劇 | 女 | 4 | 2 | 5 | 1.3 | 41.6 | 0.3 | 4 | 3 | 8 | 2 | 66.7 | 0.5 |
| | 英語 | | 6 | 2 | 5 | 0.8 | 16.7 | 0.1 | 6 | 2 | 6 | 1.0 | 20.0 | 0.1 |
| | 花道 | | 8 | 4 | 9 | 1.1 | 16.1 | 0.1 | 8 | 4 | 9 | 1.1 | 16.1 | 0.1 |
| | 音楽 | | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 6 | 0 | 1 | 0.2 | 3.3 | 0 |
| | 化学 | | 6 | 3 | 9 | 1.5 | 30.0 | 0.2 | 6 | 3 | 9 | 1.5 | 30.0 | 0.2 |

表21　ホーム・ルーム，クラブ集団の特性

| 分類 | 集団名 | 性別 | 第3次調査（37年12月） N 人数 | R 一対数 | C 選択総数 | E 平選択均数 | I 相互作用指数 | $C_o$ 凝集性の指数 | クラブ参加程度 常時参加する | ときどき参加する | あまりしない参加 | 全然参加しない |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学級集団 | A 組 | 男 | 23 | 18 | 50(103) | 2.2 | 9.88 (20.4) | 0.071 | | | | |
| | B 組 | | 23 | 21 | 45( 82) | 2.0 | 8.89 (16.2) | 0.083 | | | | |
| | C 組 | | 23 | 17 | 48(111) | 2.1 | 9.48 (21.9) | 0.067 | | | | |
| | A 組 | 女 | 25 | 10 | 35(115) | 1.4 | 5.83 (19.2) | 0.033 | | | | |
| | B 組 | | 25 | 20 | 46(116) | 1.8 | 7.66 (19.3) | 0.06 | | | | |
| | C 組 | | 25 | 24 | 62(129) | 2.1 | 9.48 (21.5) | 0.067 | | | | |
| クラブ集団 | 水泳 | 男 | 4 | 2 | 4 | 1 | 33.3 | 0.33 | 2 | 1 | 1 | |
| | 柔道 | | 4 | 3 | 9 | 2.2 | 75.0 | 0.5 | 3 | 1 | | |
| | 陸上 | | 5 | 4 | 10 | 2.0 | 50.0 | 0.4 | 3 | 2 | | |
| | テニス | | 3 | 0 | 1 | 0.3 | 16.7 | 0 | | | 1 | 1 |
| | 野球 | | 10 | 10 | 27 | 2.7 | 30.0 | 0.2 | 7 | 2 | | |
| | ワンゲル | | 3 | 0 | 1 | 0.3 | 16.6 | 0 | | 1 | 1 | |

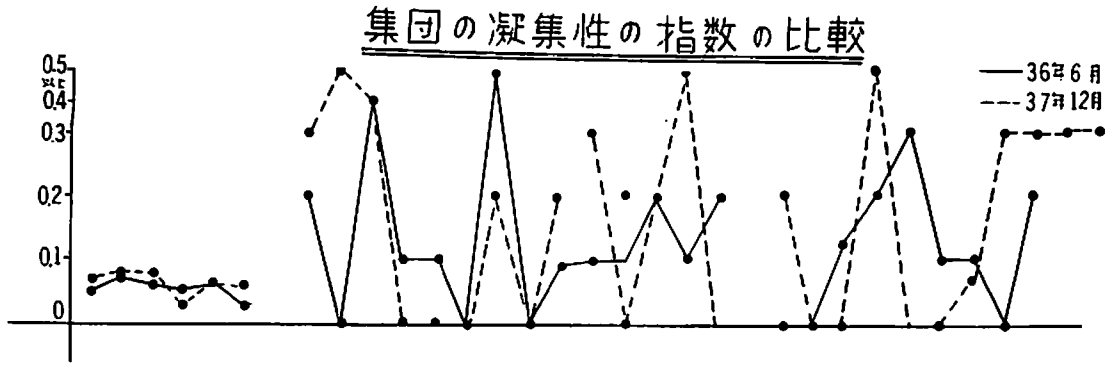
※N＝成員数
C＝選択総数 choice made
R＝相互選択の数
$E=\frac{C}{N}$（集団の拡張性の指数 index of group espansimeness）
$I=\frac{C\times100}{N(N-1)}$（相互作用指数 interaction index）
$C_o=\frac{2R}{N(N-1)}$（集団の凝集性の指数，index of group cohesion）
以上は C.HProctos.
C.PLoomis
G.A Lundberg
M.Steele の指標を併用した。

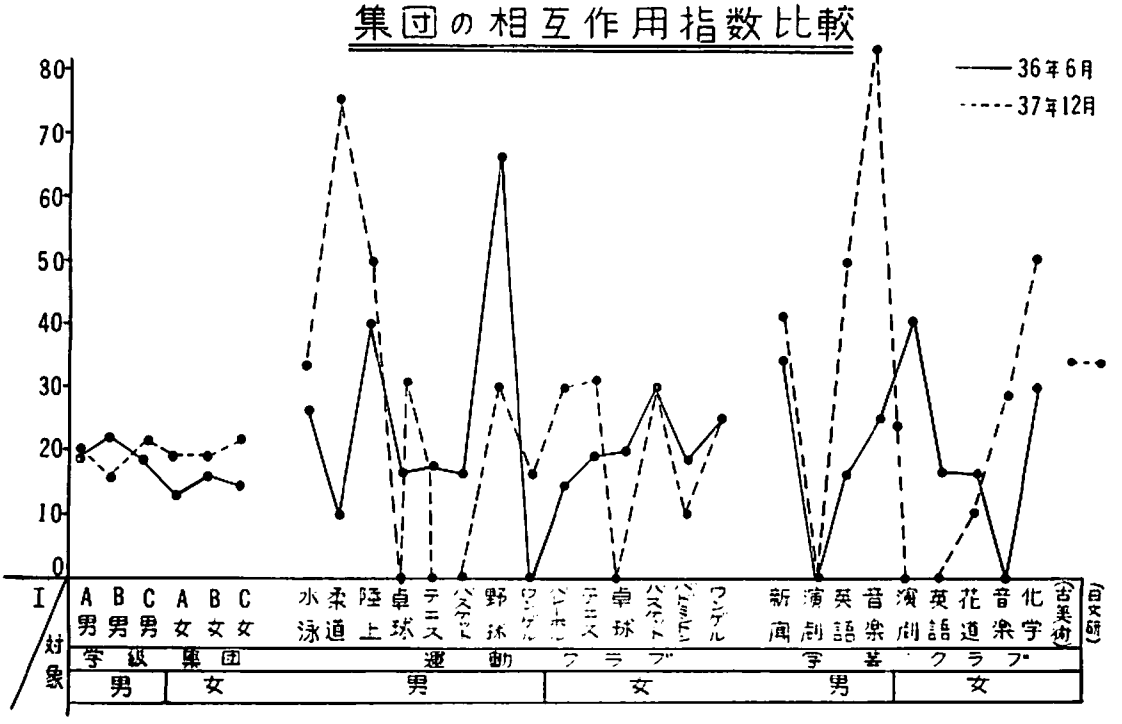
第1次でクラブ無所属者が8人であったのが第3次では31人になってい

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| バレー | | 6 | 3 | 9 | 1.5 | 30.0 | 0.2 | 4 | 2 | | | |
| テニス | 女 | 10 | 13 | 28 | 2.8 | 31.1 | 0.28 | | 5 | 4 | | |
| バスケット | 女 | 6 | 3 | 9 | 1.5 | 30.0 | 0.2 | 4 | 2 | | | |
| バドミントン | 女 | 2 | 1 | 2 | 1 | 100 | 1 | 1 | | | | 1 |
| ワンゲル | 女 | 4 | 1 | 3 | 0.75 | 25.0 | 0.2 | 2 | 1 | 1 | | |
| 新聞 | 男 | 4 | 1 | 5 | 1.25 | 41.6 | 0.2 | 3 | 1 | | | |
| 英語 | 男 | 2 | 0 | 11 | 0.5 | 50.0 | 0 | 1 | 1 | | | |
| 音楽 | 男 | 4 | 4 | 10 | 2.5 | 83.3 | 0.67 | 4 | | | | |
| 日本文学研 | 男 | 3 | 1 | 2 | 0.7 | 33.3 | 0.33 | 1 | | | | 1 |
| 花道 | 女 | 6 | 1 | 3 | 0.5 | 10.0 | 0.07 | 5 | 1 | | | |
| 音楽 | 女 | 7 | 6 | 12 | 1.7 | 28.5 | 0.28 | 5 | 2 | | | |
| 化学 | 女 | 3 | 1 | 3 | 1 | 50.0 | 0.33 | 2 | 1 | | | |
| 古美術 | 女 | 11 | 17 | 38 | 3.45 | 34.5 | 0.31 | 5 | 6 | | | |
| 日本文学術 | 女 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | 2 | | | |
| 美術 | 女 | 4 | 1 | 4 | 1 | 33.3 | 0.17 | | 1 | 2 | | |

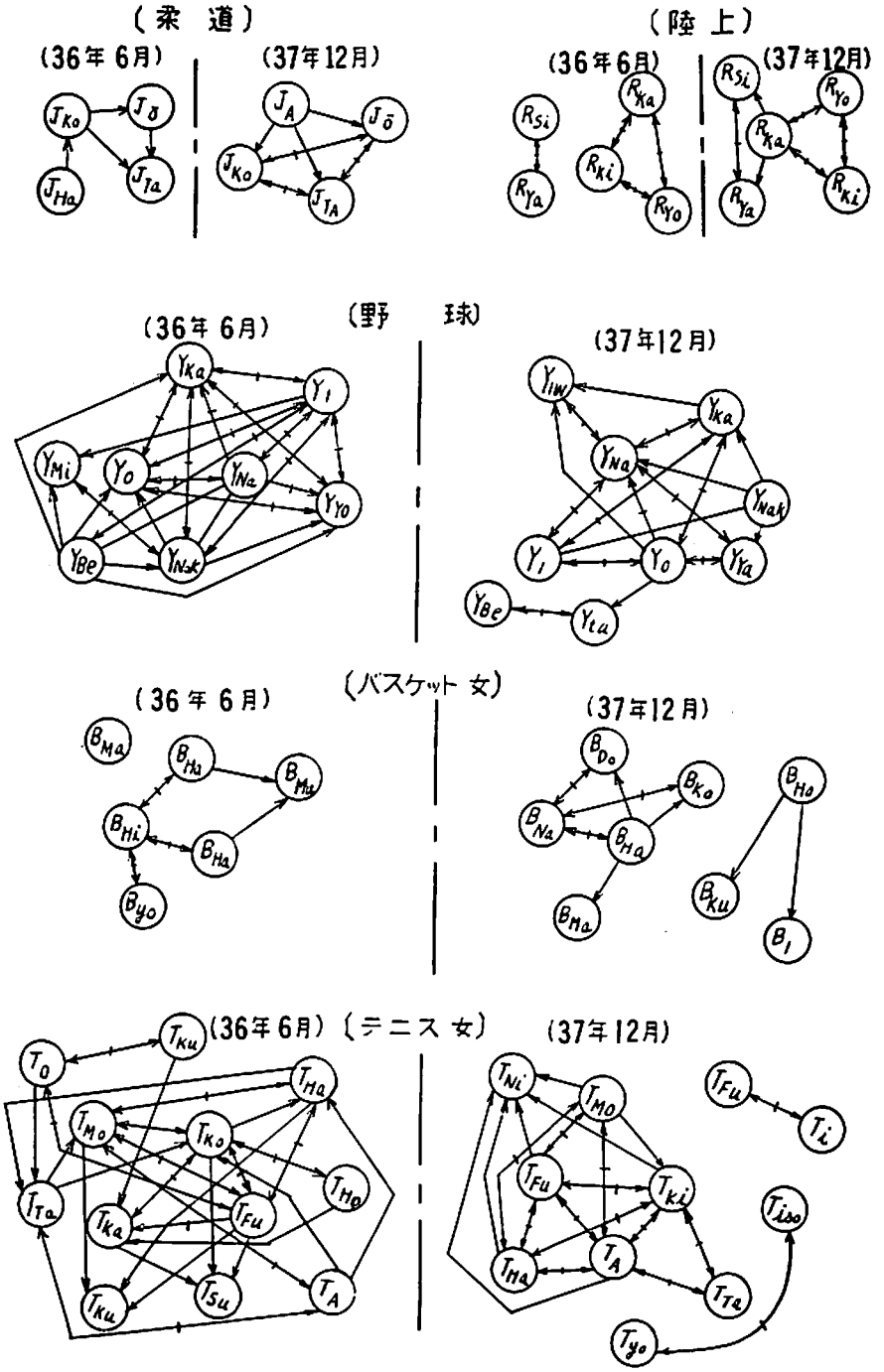
る。
学級集団のNの合計からクラブ集団のNの合計を差引いて31以上になるがそれはクラブに学年として1人所属いる者がそれに該当する。

グラフ7

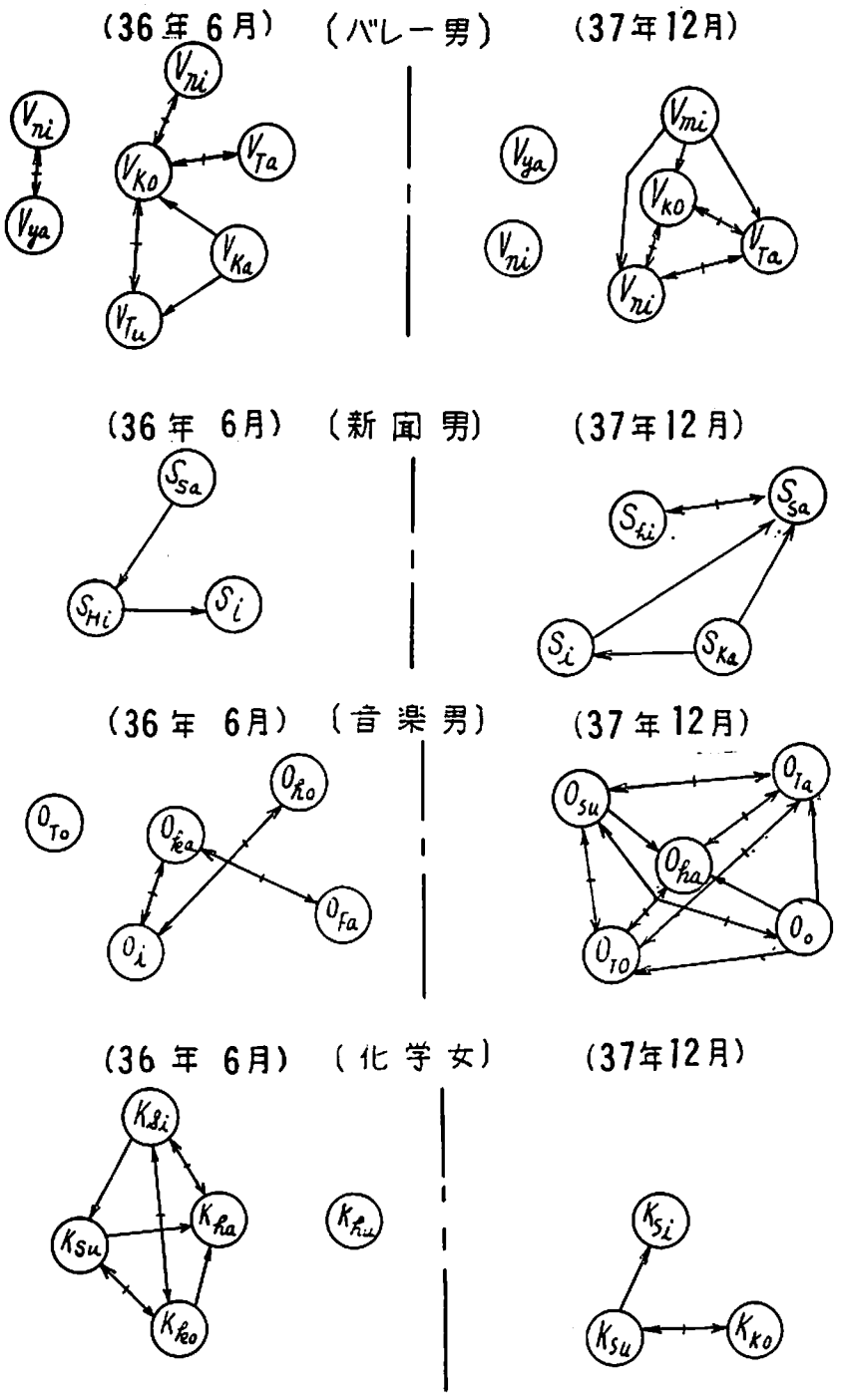

集団の凝集性の指数の比較
0.5
0.4
0.3
0.2
0.1
0
36年6月
37年12月


集団の相互作用指数比較
80
70
60
50
40
30
20
10
0
36年6月
37年12月
I
対象
A男
B男
C男
A女
B女
C女
水泳
柔道
陸上
卓球
テニス
バスケット
野球
ワンゲル
バレーボール
テニス
卓球
バスケット
バドミントン
ワンゲル
新聞
演劇
英語
音楽
演劇
英語
花道
音楽
化学
(古美術)
(自文研)
学級集団
運動クラブ
学芸クラブ
男
女
男
女
男
女

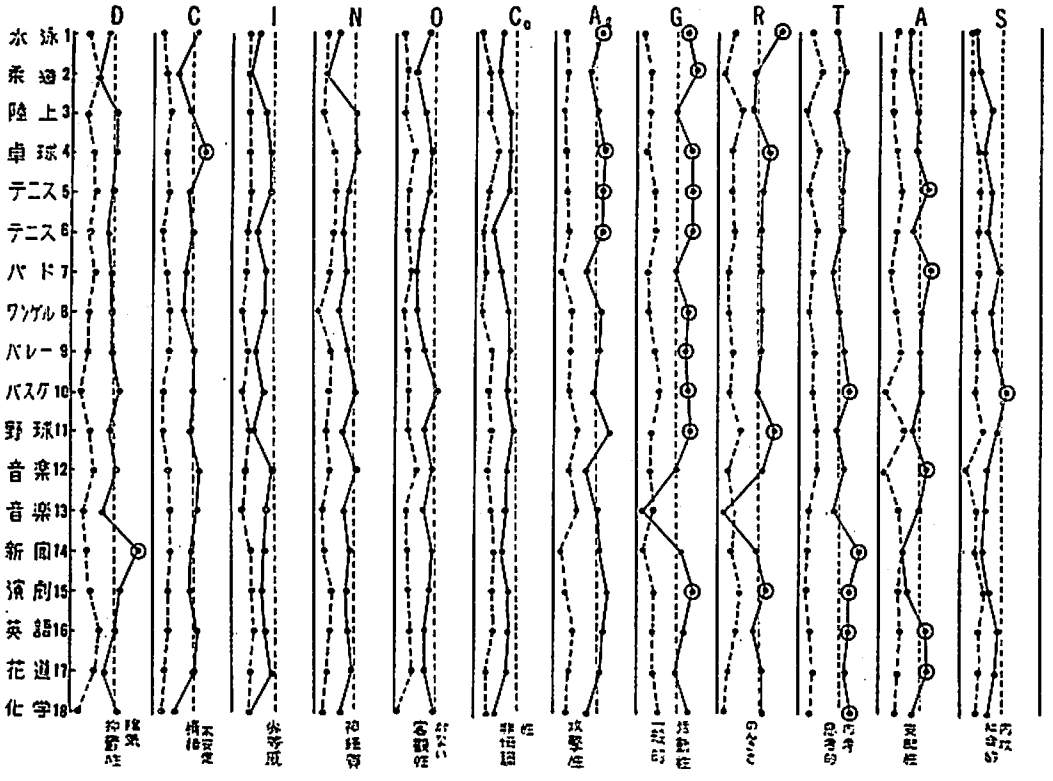
グラフ6


(柔 道)
(36年 6月)
(37年12月)
(陸 上)
(36年6月)
(37年12月)
(野 球)
(36年 6月)
(37年12月)
(バスケット 女)
(36 年 6 月)
(37年12月)
(36年6月) (テニス 女)
(37年12月)

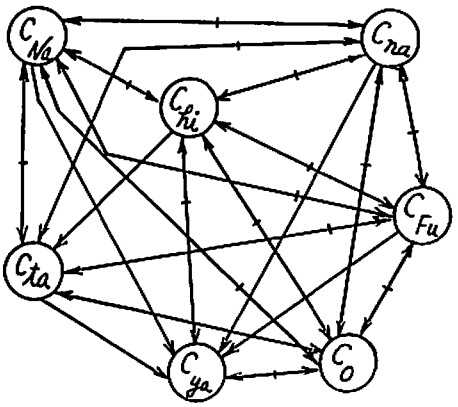
グラフ8


(36年 6月)
(バレー男)
(37年12月)
(36年 6月)
(新聞男)
(37年12月)
(36年 6月)
(音楽男)
(37年12月)
(36年 6月)
(化学女)
(37年12月)

グラフ9〔YG検査によるクラブの特性〕――検査値（平均）……標準偏差値



〔古美術女〕（37年12月）




高２の２学期を終ると木校でもクラブ活動の直接参加から遠のいていくようである。

高２のはじめでさえ，何らのクラブにも関係しなかったものが高１の約４倍ある。

第20,21,グラフ，6,7,8,について若干考察してみたい。学級集団については，相互作用指数，凝集性ともに変化はあまりみられないが，クラブ集団では運動，学芸ともに多くの変化を生じせしめている。これら集団の特性はこれら集団の人間関係（友人関係）促進の機能を多くもっていることがうかがえる。とくに表21の活動との関係でこれらをみるときに常時活動をしているものほど interaction index も index of group cohesion も高い。しかし高３になると一日の生活時間の中でクラブ活動にさける時間がなくなるということは人間形成の面からは大きな損失であるといわなければならない。学校教育で自己疎外的利用[1]をさけても広義の自己疎外的条件は充ちあふれているようである。

グラフ6,7,8,はとくに高い（interactionn index や index ot group cohesion）をしめしているものが，Sociogam の上でどのような変化をしめし，又高率と gram の type との関連たをみものである。人数の多いところで高い値が継続しているところは net type（網状）が多いことがわかる。これらは既述の leadership の養成と関連させ，今後の club 活動の指導の具体的内容として指導場面に生かすべきである。

表22 ＹＧ検査によるクラブの特性

| 文部 | クラブ | 性別 | 項目 / M.SD | N | D | C | I | N | O | C。 | Ag | G | R | T | A | S |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 運動クラブ | 水泳 | 男 | R | 5 | 8.4 | 11.0 | 6.4 | 6.4 | 9.0 | 6.6 | 11.6 | 12.0 | 15.4 | 9.4 | 7.4 | 3.8 |
| | | | SD | | 4.1 | 2.1 | 4.4 | 3.6 | 2.6 | 1.0 | 2.7 | 1.8 | 3.4 | 3.0 | 4.7 | 2.3 |
| | 柔道 | 男 | R | 5 | 6.4 | 6.4 | 4.6 | 3.8 | 5.2 | 5.4 | 8.0 | 15.0 | 9.8 | 11.4 | 7.8 | 4.6 |
| | | | SD | | 6.0 | 3.8 | 4.0 | 3.2 | 3.3 | 3.2 | 3.0 | 3.5 | 1.9 | 5.6 | 3.2 | 2.7 |
| | 陸上 | 男 | R | 5 | 10.6 | 9.2 | 8.2 | 10.2 | 7.8 | 8.2 | 10.0 | 9.8 | 8.6 | 9.2 | 9.4 | 7.6 |
| | | | SD | | 3.7 | 4.5 | 4.3 | 2.5 | 2.5 | 3.4 | 2.0 | 3.1 | 5.4 | 1.6 | 3.4 | 2.8 |
| | 卓球 | 男女 | R | 10 | 10.4 | 13.1 | 9.1 | 10.6 | 9.2 | 8.9 | 12.3 | 13.6 | 12.7 | 11.6 | 9.0 | 5.7 |
| | | | SD | | 5.2 | 3.8 | 4.6 | 5.2 | 5.0 | 5.1 | 2.5 | 2.5 | 3.4 | 5.0 | 4.8 | 4.5 |
| | テニス | 男 | R | 8 | 9.4 | 9.1 | 9.6 | 8.8 | 8.6 | 8.1 | 11.6 | 13.6 | 10.9 | 10.5 | 11.6 | 7.5 |
| | | | SD | | 5.7 | 4.1 | 4.9 | 5.8 | 3.4 | 3.6 | 2.8 | 4.3 | 3.4 | 2.6 | 5.9 | 4.9 |
| | テニス | 女 | R | 11 | 8.4 | 10.2 | 6.1 | 7.2 | 6.8 | 4.5 | 11.7 | 13.8 | 10.5 | 10.5 | 8.1 | 6.4 |
| | | | SD | | 4.6 | 2.4 | 3.8 | 5.0 | 3.3 | 2.0 | 3.7 | 4.2 | 4.1 | 4.6 | 4.9 | 4.2 |
| | バドミントン | 女 | R | 7 | 9.1 | 8.3 | 8.7 | 8.0 | 5.9 | 6.3 | 7.3 | 9.9 | 10.1 | 8.3 | 12.7 | 9.7 |
| | | | SD | | 5.9 | 3.2 | 3.2 | 4.5 | 4.9 | 2.4 | 1.6 | 2.8 | 2.2 | 3.8 | 3.0 | 4.9 |
| | ワンゲル | 男女 | R | 5 | 9.6 | 8.0 | 8.0 | 6.8 | 5.6 | 8.2 | 11.0 | 12.2 | 10.6 | 10.0 | 10.6 | 7.2 |
| | | | SD | | 4.8 | 4.6 | 2.1 | 1.9 | 2.1 | 1.6 | 4.1 | 2.6 | 2.9 | 2.3 | 4.3 | 3.3 |
| | バレーボール | 男 | R | 8 | 9.1 | 10.6 | 5.9 | 8.4 | 7.4 | 8.4 | 10.9 | 11.5 | 10.5 | 11.0 | 10.0 | 8.6 |
| | | | SD | | 4.0 | 4.2 | 3.7 | 4.7 | 3.4 | 4.9 | 3.2 | 4.2 | 3.3 | 3.8 | 5.3 | 4.2 |

① 波多野完治　人間成長と学習，現代教育学第２巻pp39～40

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | バスケットボール | 女男 | R | 5 | 11.2 | 10.4 | 7.8 | 10.6 | 10.4 | 7.8 | 9.6 | 12.4 | 9.4 | 12.6 | 10.4 | 11.0 |
| | | | SD | | 2.4 | 2.4 | 2.7 | 4.7 | 3.4 | 3.4 | 3.1 | 5.2 | 2.9 | 3.6 | 1.5 | 3.2 |
| | 野球 | 男 | R | 8 | 9.1 | 9.6 | 5.1 | 7.3 | 7.9 | 9.6 | 13.4 | 13.6 | 13.9 | 9.1 | 8.1 | 8.4 |
| | | | SD | | 4.9 | 2.5 | 4.8 | 3.6 | 3.9 | 4.0 | 5.4 | 3.6 | 5.9 | 4.6 | 6.0 | 5.6 |
| 学芸クラブ | 音楽 | 男 | R | 5 | 10.4 | 11.6 | 10.0 | 10.8 | 9.0 | 7.8 | 7.6 | 9.6 | 10.8 | 11.0 | 11.8 | 6.2 |
| | | | S.D | | 5.6 | 4.0 | 3.3 | 4.4 | 5.3 | 3.4 | 3.4 | 3.0 | 2.6 | 4.8 | 1.7 | 1.5 |
| | 音楽 | 女 | R | 6 | 7.8 | 11.0 | 8.7 | 7.3 | 7.2 | 7.2 | 10.2 | 1.1 | 1.2 | 8.7 | 9.8 | 5.8 |
| | | | S.D | | 3.0 | 4.8 | 2.7 | 2.6 | 3.2 | 4.1 | 5.4 | 3.9 | 3.9 | 2.7 | 4.7 | 3.4 |
| | 新聞 | 男 | R | 4 | 16.0 | 9.3 | 8.3 | 9.0 | 9.3 | 6.5 | 10.8 | 10.5 | 9.0 | 15.0 | 5.5 | 5.0 |
| | | | S.D | | 3.5 | 4.6 | 4.5 | 3.0 | 3.1 | 4.9 | 1.9 | 1.7 | 3.5 | 2.2 | 5.5 | 3.3 |
| | 演劇 | 男女 | R | 9 | 11.7 | 9.7 | 7.2 | 8.1 | 8.6 | 8.1 | 12.4 | 13.3 | 11.9 | 12.2 | 6.6 | 6.8 |
| | | | S.D | | 4.2 | 4.0 | 5.0 | 5.0 | 3.7 | 4.2 | 2.4 | 4.0 | 5.2 | 1.9 | 4.6 | 5.8 |
| | 英語 | 男女 | R | 9 | 10.1 | 11.2 | 8.3 | 8.6 | 7.9 | 8.2 | 11.1 | 11.8 | 8.8 | 12.3 | 11.2 | 9.0 |
| | | | S.D | | 6.6 | 4.8 | 5.6 | 4.8 | 4.0 | 4.2 | 4.5 | 4.1 | 4.9 | 2.9 | 5.0 | 4.7 |
| | 花道 | 女 | R | 8 | 8.8 | 10.1 | 10.0 | 9.5 | 7.4 | 7.8 | 10.6 | 9.6 | 10.6 | 11.0 | 11.5 | 8.1 |
| | | | S.D | | 5.8 | 3.8 | 4.9 | 3.4 | 4.9 | 2.1 | 3.9 | 4.1 | 2.2 | 3.6 | 4.5 | 4.4 |
| | 化学 | 男女 | R | 5 | 10.4 | 5.6 | 4.8 | 6.6 | 9.8 | 4.6 | 8.6 | 12.2 | 11.0 | 12.4 | 8.6 | 6.2 |
| | | | S.D | | 1.4 | 2.4 | 4.0 | 2.7 | 0.7 | 2.0 | 3.3 | 5.2 | 1.8 | 2.6 | 3.9 | 3.9 |

表23　田中・ビネー式知能検査クラブ別

| 対象クラブ | 性別 | N | 得点平均 | 知能点 最高 | 知能点 T 最低 | 知能点 R | 偏差値 最高 | 偏差値 T 最低 | 偏差値 R |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 陸上 | 男 | 5 | | 173 | 121 | 145 | 65 | 43 | 31 |
| 卓球 | 男 | 5 | | 226 | 153 | 166 | 81 | 55 | 67 |
| 卓球 | 女 | 4 | | 185 | 133 | 149 | 67 | 46 | 54 |
| バドミントン | 女 | 7 | | 162 | 103 | 132 | 56 | 36 | 47 |
| ワンゲル | 男 | 2 | | 175 | 162 | 169 | 64 | 63 | 63 |
| ワンゲル | 女 | 3 | | 189 | 119 | 164 | 67 | 42 | 59 |
| バスケット | 男 | 1 | | 161 | | 161 | 59 | | 59 |
| バスケット | 女 | 4 | | 150 | 130 | 137 | 58 | 44 | 52 |
| テニス | 男 | 8 | | 204 | 131 | 166 | 73 | 45 | 59 |
| テニス | 女 | 11 | | 206 | 135 | 167 | 75 | 46 | 59 |
| バレー | 男 | 8 | | 189 | 129 | 168 | 70 | 46 | 60 |
| 野球 | 男 | 8 | | 174 | 120 | 152 | 61 | 42 | 56 |
| 水泳 | 男 | 5 | | 208 | 148 | 179 | 71 | 52 | 64 |
| 柔道 | 男 | 5 | | 202 | 134 | 174 | 72 | 48 | 63 |
| 英語 | 男 | 3 | | 178 | 127 | 150 | 67 | 43 | 56 |
| 英語 | 女 | 6 | | 210 | 138 | 159 | 73 | 52 | 58 |
| 花道 | 女 | 8 | | 196 | 103 | 146 | 67 | 36 | 51 |
| 音楽 | 女 | 6 | | 183 | 118 | 147 | 65 | 42 | 56 |
| 音楽 | 男 | 5 | | 212 | 149 | 178 | 73 | 51 | 61 |

表22グラフ5は本校で実施したYGテストの結果をクラブ別に集計したものである。D（抑鬱性）について新聞クラブが高いので特筆される。C（情緒不安定）について卓球クラブが高い。I（劣等感）は学年の特性があまりでていない。Ag（攻撃性）について水泳，卓球，テニス，演劇などにかなり高い得点がみられる。G（一般的活動性）は全般に高い得点をしめしている，音楽は低い。

T（思考的内容）に新聞，卓球，バスケット，英語，化学が高い[1]以上クラブの平均化された特性がだされたのであるが，これらがクラブによる特性が，そのような性格の類似したものが集ったのか，あるいはこれら平均化とその中における性格の特異性がどのように関連しあっていくか，そしてそれらの interaction としての友人関係がどのように影響を受けてゆくか，興味ある問題である。友人関係が性格の類似したもの，相反する性格のもの，類似と関連して全体の平均に近ずくとする Allport の説な

1）本校研究調査課　当付中高生徒のYGテスト結果について，1961，付中高研究紀要の資料及び検査からまとめたものである。

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 化　学 | 男 | 1 | 183 | | 183 | 63 | | 63 |
| 化　学 | 女 | 5 | 180 | 143 | 156 | 66 | 50 | 58 |
| 新　聞 | 男 | 4 | 176 | 112 | 157 | 63 | 47 | 58 |
| 演　劇 | 男 | 5 | 205 | 162 | 179 | 75 | 60 | 68 |
| 演　劇 | 女 | 4 | 190 | 114 | 155 | 71 | 48 | 58 |

ど，この実態からは把握の材料を導き出すことは困難である。これらのグループが気質，性格まで触れ合う関係から外周辺へ向い，社会的態度，意見などに至るまでこれらの中に含まれる因子は学校教育の中で有効な tecknique になりえるだろう。

表23は田中B式知能検査法によるクラブの特性をあげたものである。これは高2.3年（当校では高3は実質的にはクラブに参加しないが）における相関を今後の課題として解決をはかりたい。

表24　親しい友人の数は6月と変りましたか性

| 性別 | 内容 / N1 / % | 変いって | 変いってない | 無明記不 |
|---|---|---|---|---|
| 男 | 68 | 45 | 23 | 0 |
| | 100.0 | 66.2 | 33.8 | 0 |
| 女 | 71 | 41 | 29 | 1 |
| | 100.0 | 57.7 | 40.8 | 1.4 |

表25　変っている人はその人数はどうですか

| 性別 | 内容 / N1 / % | 多くない | 少くない | 無明記不 |
|---|---|---|---|---|
| 男 | 45 | 34 | 11 | 0 |
| | 100.0 | 75.6 | 24.4 | 0 |
| 女 | 41 | 34 | 6 | 1 |
| | 100.0 | 82.9 | 14.6 | 2.5 |

表26　変っていない人は現状についてどうですか

| 性別 | 内容 / N1 / % | 満足している | 満足していない |
|---|---|---|---|
| 男 | 36 | 22 | 14 |
| | 100.0 | 61.1 | 38.9 |
| 女 | 21 | 15 | 6 |
| | 100.0 | 71.4 | 28.6 |

表27　友人の数の変った理由

| クラブ活動関係 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 内容 / N1 / % | 話合う機会が多い | 試合、発表のための練習 | 活動が多く接する機会が多い | 夏休み |
| 51 | 3 | 12 | 33 | 3 |
| 100.0 | 5.9 | 23.5 | 64.7 | 5.9 |

表28　友人の数の変った理由

| その他の関係で | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| N1 / % | 座席がえ | 通学の関係 | 時が自然にたってきたなれ | 学園祭で | キャンプで | 休み時間で図書室で講座関係 |
| 45 | 10 | 2 | 13 | 12 | 4 | 4 |
| 100.0 | 22.0 | 4.4 | 28.7 | 26.4 | 8.9 | 8.6 |

表29　親しい友人との話しの内容は6月からすると変っていますか

| 性別 | 内容 / N1 / % | 変いって | 変いもあって | ほどなと変いんら | 全ら然な変い | 無明記不 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 68 | 4 | 21 | 41 | 2 | |
| | 100.0 | 5.9 | 30.9 | 60.3 | 2.9 | 0 |
| 女 | 71 | 6 | 43 | 39 | 2 | 0 |
| | 100.0 | 8.5 | 33.8 | 54.9 | 2.8 | 0 |

表30　話しの内容はどんなふうに変りましたか

| 性別 | 内容 / N1 / % | 個人的なお互いこと | 一般的なお互いこと | その他 |
|---|---|---|---|---|
| 男 | 15 | 9 | 2 | 4 |
| | 100.0 | 60.0 | 13.3 | 26.7 |
| 女 | 23 | 17 | 4 | 2 |
| | 100.0 | 73.9 | 17.4 | 8.7 |

表31　あなたは6月からクラブを変っていますか。

| 性別 | 内容 / N1 / % | 変いって | 変いってない | その他 | 無明記不 |
|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 68 | 21 | 46 | 2 | 0 |
| | 100.0 | 29.4 | 67.7 | 2.9 | 0 |
| 女 | 68 | 16 | 53 | 0 | 2 |
| | 100.0 | 22.5 | 74.6 | 0 | 2.8 |

表32　現在クラブ活動にどれぐらい参加していますか。

| 性別 | 内容 / N1 / % | ほど毎と毎日 | ときどき | あまり参加 | ぜんぜん参加 | 無明記不 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 68 | 49 | 12 | 4 | 2 | 1 |
| | 100.0 | 72.1 | 17.6 | 5.9 | 2.9 | 1.5 |
| 女 | 71 | 38 | 18 | 5 | 8 | 2 |
| | 100.0 | 53.5 | 25.4 | 7.0 | 11.3 | 2.8 |

表33 現在のクラブに対する希望　　N=22

| 内容 | 施設用具に関するもの | クラブ維持費に関するもの | 疲労に関するもの | クラブ練習の強化に関するもの | クラブ時間に関するもの | クラブ発表機会に関するもの | クラブ団結に関するもの | 勉学とクラブの両立に関するもの | クラブの活発化に関するもの | クラブ内の人間関係に関するもの | コーチに関するもの | 一人一クラブ制に関するもの | クラブのあり方に関するもの |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| % | 33 | 2 | 1 | 2 | 4 | 2 | 8 | 6 | 13 | 17 | 9 | 3 | 12 |
| 100 | 29.5 | 1.8 | 0.9 | 1.8 | 3.6 | 1.8 | 7.1 | 5.4 | 11.6 | 15.2 | 8.0 | 2.7 | 30.7 |

表34 現在のホーム・ルームに対する希望

| $N_1$ % | 何とも思わない | 単位の活動をやるべきだホーム・ルーム | とりがないとしてのままホーム・ルーム | 伝達・形式ばった事が多すぎる | お互いの接触時間が少い | ましにくいまじめな話しを | にあまり期待しないホーム・ルーム | 親しい者同士のグループがあり | 現在のままでよい | 無記 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 80 | 7 | 18 | 8 | 9 | 9 | 2 | 11 | 6 | 10 | 59 |
| 100.0 | 8.8 | 22.5 | 10.0 | 11.3 | 11.3 | 2.5 | 13.8 | 7.4 | 12.4 | |

表35 現在の友人関係がプラスになるか。

| 性別 | $N_1$ | 内容 % | なる | なるようだ | ない | わからない | 無記不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 249 | 100.0 | 66.3 | 5.6 | 6.8 | 20.5 | 4.8 |
| 女 | 235 | 100.0 | 72.8 | 4.3 | 5.5 | 16.2 | 1.2 |

表36 現在の友人関係をこのまま続けてゆきたいか。

| 性別 | $N_1$ | 内容 % | 続けたい | やめたい | どうでもよい | 疑問がある | わからない | 自然にまかせる | 無記不明 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 262 | 100.0 | 93.9 | 0 | 0.8 | 3.4 | 0.8 | 0 | 1.1 |
| 女 | 252 | 100.0 | 77.8 | 2.7 | 7.0 | 1.9 | 8.8 | 0.8 | 0.8 |

club,やHome-room の凝集性や相互選択などに関連をもちながらもその集団の基本である dyard relationship は多くの変化を生じせしめる場合が多い。友人の数，話しの内容，クラブなどへの参加，各集団への希望はこれらの事項を裏がきしていると考えてよいであろう。

### 今後の問題点

悩みにおける学友関係では，とくに悩みの相談者という位地において，又理想を具体化する次元において重要なことがあきらかにされた。誰にも相談しないという群を学友関係の今後のあり方という観点と併合してみつめていくと青年期の人間関係のもっと高い価値的面があきらかにされるかもしれない。

学友関係が相互作用であるだけにそこには「気質的なことをふれあう関係」から「意見をのべあう関係」まで多くの巾をゆうしている，これら情緒面のとらえかたと集団としてのとらえかた，個人的問題点になるが，心理学や社会学の知識をたくわえることが急務のようである，又長期にわたる研究組織やそれらの中で具体化される項目を問題と解決のレールの上にのせること，又具体化から抽象化をはかること，など問題は山積している，学校教育の支えになる教育学の確立への期待とともに学校教育に対して科学的態度をもつことの必要性を痛感した。

クラブ集団が機能的には高度のものをもちながらそれが関与する時間的ワクのなさをどうすればよいか，これらを進学，就職校などとの対比（階層）でとらえてみなければならない。研究といっても他人の業績を吸収することにより出発に位置したばかりである。自分なりに問題点を感じた面もあるし，それでこの研究に着手した意味はあったと信ずる。あせらず一歩一歩資料集めに精だし，いくらかでも問題解決に役立て，できるならば系統的体系を確立できる夢をもちたいものである。なおこの中の資料で第2回高等学校教育研究会（奈良女子大付高），第3回高等学校教育研究会（東京教育大付属駒場高）で発表したものがある。

ここまでまとめるに際し，研究会の発表の前に東京教育大の竹之下教授に特別のご指導をたまわりました。調査実施に際して本校生活課の三鼓先生はじめ多くの先生方のご協力をえました。大阪府，市の教育研究所の先生方，大

阪，日新高校の岡田先生にはこの研究の出発に際しご尽力をいただきました。その他多くの方々のご協力で今一部をまとめました。感謝の気持は今後問題点の解決への接近によって確かめていただくつもりです。

## 参　考　文　献


| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | オッタウエイ | | | |
| ① | 福永　安祥訳 | 教育と社会 | 1953 | 関書院 |
| ② | 阪本　一郎他 | 個性の診断 | 1661 | 牧書店 |
| ③ | 田合　章他 | 現代教育学　第17巻（学校） | 1961 | 岩波書店 |
| ④ | 清水幾太郎 | 社会的人間論 | 1954 | 角川書店 |
| ⑤ | 小川　利夫他 | 現代教育学　第16巻（青年の問題） | 1961 | 岩波書店 |
| ⑥ | 宮坂　哲文他 | 国民教育と生活指導 | 1960 | 明治図書 |
| ⑦ | 依田　新 | 青年心理学講座 | 1959 | 金子書房 |
| ⑧ | 菅又　淳他 | 保健体育学講座 | 1958 | 体育の科学社 |
| ⑨ | ドペス<br>吉倉　節夫訳 | 青年期 | 1951 | 白水社 |
| ⑩ | ウイラード，ウオラー<br>石山　修平訳 | 学校集団 | 1957 | 明治図書 |
| ⑪ | 中森　孜郎他 | 現代教育学　第18巻（教師） | 1961 | 岩波書店 |
| ⑫ | 石崎恒次郎 | 現代教育社会学 | 1956 | 理想社 |
| ⑬ | 望月　衛 | 青年心理学 | 1951 | 光文社 |
| ⑭ | 阪本　一郎他 | 人間関係の診断 | 1961 | 牧書店 |
| ⑮ | 豊沢　登 | 新しい生活指導の技術 | 1954 | 紫生院 |
| ⑯ | 鹿野　健次<br>横山　一郎他 | 体育心理 | 1962 | 錦正社 |
| ⑰ | 波多野完治他 | 現代教育学　第2巻（教育学概論） | 1960 | 岩波書店 |
| ⑱ | 古旗　安好 | 教育心理学　第14巻 | 1956 | 世界文化社 |
| ⑲ | 青井　和夫他 | 組織，集団，リーダーシップ | 1962 | 培風館 |
| ⑳ | 日本グループダイナミックス編 | グループダイナミックスの研究1,2,3. | 1955 | 理想社 |
| ㉑ | 村田　宏雄他 | 社会調査の技術 | 1955 | 誠信書房 |
| ㉒ | 清水幾太郎他 | 現代教育学　第1巻（教育哲学） | 1960 | 岩波書店 |
| ㉓ | 上原　専禄 | 現代教育学　第4巻（教育思想） | 1961 | 岩波書店 |
| ㉔ | 日本教育社会学会編 | 教育社会学研究（17集） | 1962 | 東洋館出版社 |

## 参　考　資　料


| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | 国立教育研究所 | 高等学校生徒指導調査 | 1955 |
| | 大阪教育研究所 | 〃 | 1958 |
| ② | 東京教育大学付属坂戸高校 | 高校生の悩みと意識調査 | 1659 |
| ③ | 東大付属高校 | 高校生の悩みの調査 | 1960 |
| ④ | 東京教育大学付属高校 | 友人関係の促進と人権意識を向上させるための読書指導について | 1959 |
| ⑤ | 広島大学付属高校 | 生活意識に関する診断的研究 | 1959 |
| ⑥ | 東京教育大学付属高校 | 高校生の生徒指導のための実験的研究 | 1958 |
| ⑦ | 大阪，日新高校 | 本校生の悩みの実態 | 1958 |
| ⑧ | 横山　一郎 | 体育的活動の実際場面における男女差の研究，奈良女子大付中，高研究紀要抜刷 | 1960 |
| ⑨ | 横山　一郎 | 体育的活動を通して大人の提示する人間像における男女差の一考察，体育と小集団研究会誌 | 1961 |
| ⑩ | 広岡　亮蔵 | 9月22日　N.H.K.T.V.「親友について」 | |
| ⑪ | 石井完一郎 | 少年補導 | 1960 |
| ⑫ | 樋口　忠清他 | 当付中，高生徒のYGテストの結果，奈良女子大付中，高研究紀要発表原表資料 | 1961 |
| ⑬ | 横山　一郎 | 高校生における学友関係の実証的研究第2回高等学校研究大会報告資料 | 1960 |
| ⑭ | 横山　一郎 | 高校生における学友関係の実証的研究第3回高等学校研究大会報告資料 | 1961 |